

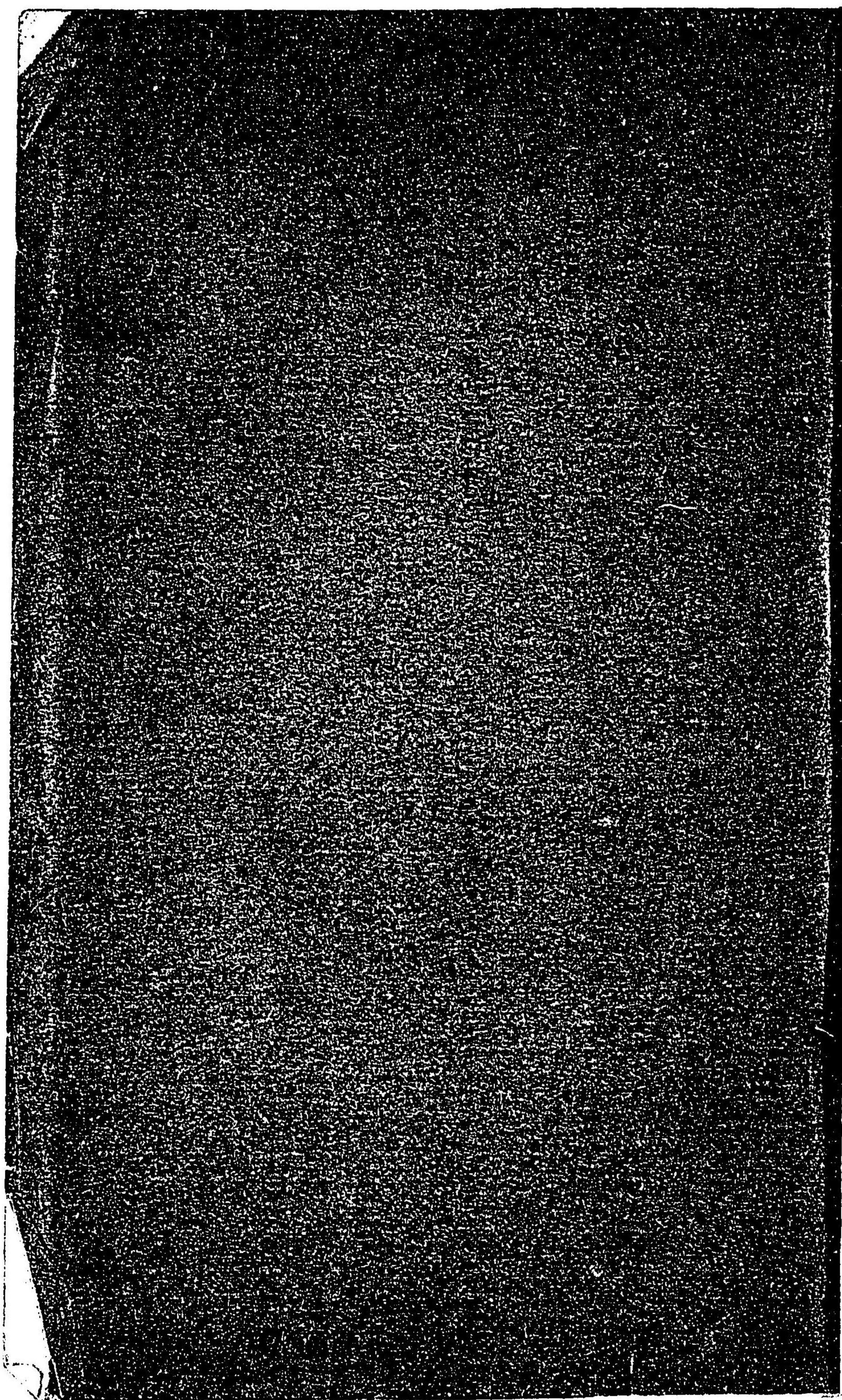


三勇士
田家

山田唯史
記

265

272





山崎屋
印

539
876

猿 飛 佐 助

真田家 三勇士 猿 飛 佐 助

第 一 回

頃 元 龜 天 正 年 間 に 於 いて、 英 雄 雲 の 如 く 各 地 に 蜂 起 し、 世 は 二 十 八 天 下 分 裂、 互 ひ に 武 威 を 争 つ て、 貝 鉦 陣 太 鼓 の 音 は 絶 ゆる 間 も なく、 所 謂 優 勝 劣 敗 弱 肉 強 食、 強 い 者 勝 ち の 世 の 中 で ござい ました、 其 の 間 に 眞 の 武 勇 則 ち 捨 先 の 功 名 を 以 つ て 或 は 大 名 と な り、 又 は 天 下 名 題 の 豪 傑 と 出 世 し も の、 指 を 屈 す れ ば 數 限 り も ござい ませ ん、 大 閥 秀 吉 織 田 信 長 の 遺 業 を 繼 い て 海 内 を 統 一 な し、 遠 く 海 外 を 征 服 し て 武 勇 を 耀 し ました が、 惜 し い か な 志 未 だ 央 なら ず して 中 途 に 斃 れ、 次 い て 徳 川 家 康 天 下 の

玉田玉秀齋 演 山田唯夫 速記

43.9.14 内交



助 佐 飛 猿

三

水火も恐れず、石も物かり、身を犠牲に供して勤くと云ふ一位、大名に猿飛佐助一代のお物語り、至極面白く、御清聴に達し、玉田家十八番獨特の口調を以つて、勇壯活潑に伺い上げますれば、何うか其の御積りで、府揚の御愛顧あらん事を願つて置きます、如何なる素性の人物であるかと申しまするに、處は信州鳥居峠の麓に、猿塚佐太夫と云ふ郷士がございまして、以前は信州川中島の城主森武藏守長可の家臣でございまして、主君武藏守が小枚山の合戦に於いて討死を遂げました、以来、忠義無類の猿塚佐太夫は、世を慕ひて一生二君に仕へない、云ふ決心を起し、夫より程遠からぬ鳥居峠の麓へ閑居なし、僅かの金のあるに任せ、田地畑を買求め、郷士と相成つて居るのでござい

助 佐 飛 猿

三

權を握り、十五代二百五十年の久しき間、幕府の政を擅にして居り、今が世造も人をして快哉を叫ばしめるものは、元祿年間、赤穂四十七義士に過ぎない位いで、何んしろ一代の英雄と稱すべき人物に到りては、半ばは大阪城に籠れ、剩す處は眞に曉の星の如く、誠に寥々たるものでございまして、就中眞田左衛門尉海野幸村に到つては、英雄中の英雄、豪傑中の豪傑と云つて可なりな人物で、智勇兼備の良將たるのみならず、軍略に於ては、楠公と肩を比べて、寧ろ其の右に出でやうと云ふ稀世の技倆あり、依つて家臣郎黨にも勇士の影なからず、勇將の許に弱卒なし、望月六郎、穴山千代、海野六郎、寛十蔵、三好清海、入道、同じ伊三、入道、猿飛佐助、此の七人を眞田の七勇士と稱へ、幸村が未だ奥三郎の昔より、思願の郎黨として寵愛一方ならず、七人の者も互いに兄弟の如く主君幸村公の手足となつて

は、武術を磨くに限るとのお言葉、左様だ之より一つ武術の稽古をして遣らう」と、何んしろ末には真田幸村の郎黨となり、其の片腕と呼ばれて、天晴天下に名聲を轟かす程の人物だ、少年ながら豪い考を起しました、サア夫から後と云ふものは、朝は早ふから鳥居峠の、奥の院へ参つて、立木を相手にいたして、頻りに剣法を學んで居る、スルト村人は又も色々、甲「オ、佐助坊様は此の頃妙な事を遣つて居るじやアないか、乙「ウ、手前も見たか、奥の院でエイヤツボン」と、立木を毆つて居られたよ、丙「ハ、ア、夫じやア猿や鹿を追つ驅けるのは廢して、商賈替へを爲さつたと見へる、何んと可笑な真似をするじやアないか」と、寄ると障ると其の噂ばかりをして居ります、が、佐助は左様な事は耳にも掛けず、例に依つてボン、エイヤツと勢い烈しく遣つて居る、處が一日一心不亂に立木に打つ附かり、果ては木劍投げ捨て、佐「ヤア、打物業は面倒なり

イデや組打參らう」と、無手と大木に抱き付き、ヤアウーン何を糞ツと、夢中になつて大木を捻じ倒さんと、力味返つて居る折柄、何處とも無く阿々と嘲笑ふ聲が聞へますから、佐助は癪に障つたと見へて、佐「ヤイ、何奴だ、乃公が必死になつて剣法を學んで居るを笑ふと云ふ事があるか、出て來せ承知せんぞ」と、云ひつゝヒョイと背後を見ると、一人の老翁が莞爾と笑ひながら立つて居る、佐「オヤツ、今笑つたのは貴様だ、老「オ、如何にも乃公だ、佐「何故、笑ふのだ、返答の次第に依つては、老人でも許しはせぬぞ」と、腕を捲つて詰め寄せた、老翁は怯ともせず、老「コリヤ佐助、其の方が幾等立木を相手にして剣法を學ぶとも、夫では死物を敵とするのだから、更に上達する氣遣はない、何うじや貴様は劍法が學びたいか、父さん、心ありげな老翁の言葉に、佐助も氣色を和げて、老「ヘイ叔父さん、劍法を學んで、武術の極意を覺へたいのじや、老「フム

シテ何うする積りじや 佐「ハイ、腕前優れた人間となつて、天
 下に其の名前を擧げたい考へで居ります 老「フム、少年ながら
 も天晴なる精神、ヨシ汝の熱心なる志しに愛で、之から乃公
 が稽古をして遣る」と、聞いた佐助は夫れへ平伏なし 佐「ハッ
 何うぞお願い申します 老「オウ、心得た、サア此方へ来い」と
 佐助を一つの廣場へ連れて行き 老「コリヤ佐助、抑も武術と云
 ふものは一藝に秀ずれば深山だ、武藝は十八番あつて、悉くを
 會得する事は容易でない、何にても一つに圖抜けさへしたら、
 餘の者は學ばずして出來る、一以つて萬に通ずとは此處の事、
 慾張つて彼れも此れもと遣りたがる奴は、少しも上達する者で
 はない、まつた武術と云ふものは、自分の心を静め、變化を考
 へ、人に疑はれたれぬ様に云ふものは、ソレ乃公が斯ふやつて身構
 へて居るが、身だぬ様に云ふものは、ソレ乃公が斯ふやつて身構
 があり居ります 老「フム、然らば打つて見る 佐「ハイ、合點です、

御免」と、佐助はエイヤツと正面より、勢ひ込んで打ち込むと
 斯は如何に今迄眼前にあつた老人の姿は見へずなり、迂路
 と見廻して居る處を、ヤツと背後より突然足をすくわれて、佐
 助はバツタリ前へ打つ倒れた、老人はニコ／＼笑いながら、ヒ
 ヨイと前へ立ち現はれ 老「ソレ見る、何故に足許に氣を附けぬ
 人の隙が見へても、自分の隙を防ぐ術を知らぬ様では駄目だ、
 我が身を油断なくするのが、武術の極意だ、萬事其の心得で居
 らねばならぬ、今日は最ふ之れで宜い、毎日怠らす此處へ出
 て参れ、宜いか忘れては相成らぬぞッ」と、云ふかと思へば、
 老翁の姿は掻き消す様に消失せた、佐助は夢に夢見た心地して
 佐「オヤツ、奇態な叔父さんだ、マア宜いわい毎日來て遣らう」
 と、サア之から後と云ふものは、雨の降る日も風の日も、意
 なく廣場へ出て参り、果ては傲性我慢の佐助、家へ歸るのは面倒
 なく廣場へ出て参り、果ては傲性我慢の佐助、家へ歸るのは面倒

助 佐 飛 猿

なと云つて、四日五日分の辨當を用意して来て、夫れを食つて仕舞ふ迄は少しも家へは歸らない、奥の院の籠り堂へ来て、其處へ寝み、夜が明けると又出掛ける處が或る夜の事、佐助は晝間の疲れで、身は綿の如くになつてグツスリ寝込んで居ると眞夜中頃とも思ふ刻限に、件の老翁が忽然と籠り堂へ現はれ出で、老コリヤ、佐助、貴様は何故正体もなく寝て居る、乃公が此の處へ来たのが判らないか』と、叱り付けられて、佐助は眼を擦り、起き直り、佐ア、之れはお師匠様でございませぬ、晝間に餘り烈しく稽古をいたしますので、身体はヘナヘナになり、夫れゆへ此の通り疲れて前後も知りませぬので………が、老黙れッ、武術を心掛ける者が前後を知らぬ程油断をする事があるか、暗夜の礫と云ふ事があるぞ、何日何時敵に出喰はすかも知れない、萬事に氣を附けなければならん、今夜は許すが之から何時来るかも知らぬから、乃公が来た時に目を覺して居

助 佐 飛 猿

ない、稽古は一層烈しくするぞ』と、斯く云ひ残して何處ともなく立ち去つた、サア、佐助は堪らない、晝間は一生懸命に稽古も無く稽古を舐み、夜になつても樂々と寝る事が出来ない、何日何時老翁が歩つて来るかも知らないので、油断も隙もございませぬ、流石の佐助もソロソロ、愚痴を溢し出した、佐ア、睡い、お負けに夜分何時来るか分らないが、之では幸棒が出来兼ねる、之りやア稽古の爲めに責め殺されるのかも知れん………、イヤ、其様な弱音を吐いては役に立たん、ナニツ之れ位いで死んで堪るか、ウム、と、力味返つて油断なく、我れと我が心を胸まして眼を見張つては居りますが、思はず知らずツイトロ、と居睡りをして居ると、突然腰をボンと蹴られ、アツと驚き目が覺めると、例の老翁が枕頭に突つ立ち、腰を蹴られ、彼の此處な白痴者奴が、乃公が来た事も分らず、腰を蹴られ

て驚く奴があるかッ、斯様な事では貴様の生命は、最早や無く
 なつて居るのだぞ、馬鹿者奴がッ、何うも生命を粗末にする奴
 だ』と、小言を云ひながら、其の儘立ち去つた、佐助は益槍と
 して、佐オヤッ、何時の間に来たのだらう、生命を取られると
 思へば寝るんぢやないが、逆眞左様な事もあるまいと思つて、
 ツイ油断をすると思はれる、實に之は何うも堪らない、ヨシ
 明日の晩は一ツ乃公の方で、反對に聲を掛けて遣らう』と、豪
 膽不敵の少年佐助は、其の翌晩に相成ると、佐サア、今夜こそ
 は一生懸命だ……』と、勿論夜具の用意をして来て居りますか
 ら、自分が何時も寝る處へ蒲團を一枚敷き、寝た様な姿に拵ら
 へ置き、素より籠り堂の事ゆへ、燈火のあるべき筈がない、眠
 つと暗い處へ身を潜めて、老翁の來たるべきや遅しと相待つて
 居りますと云ふ、愈々佐助が忍術修業、少年ながら武術忍
 術二流合併の奥義を極めるの一條は、次回に詳しく口演じま

第二回

する……。

人學ばざれば智なし、玉磨かざれば光りなしとかや、猿塚佐太
 夫の次男佐助は、圖らずも鳥居時、於いて、奇体の老翁に出合
 ひ、其の者より晝夜の別ちなく、武術を教はつて居ります、
 處が餘り老翁の教へ方が烈しいので、流石豪膽極まる佐助も、
 少々閉口したが、夫れで弱る様な少年ではない、反對に老翁を
 驚かし、身をして遣らうと、蒲團の中は寝た体にして置いて、密かに片
 脇に身を潜めて待ち構へて居る、佐助は目早く之れを認めて、漸
 々歩つて來たぞ、例の老翁、佐助は早く之れを認めて、佐
 ヨシ、來たぞ、例の老翁、佐助は早く之れを認めて、佐
 るだらう』と呼吸を殺して窺つて居りますと、二三間手前迄來
 た件の老翁は、ヒヨイと立ち止つて、老ハ、……、佐助今夜は

乃公を一杯掛ける積りで、其處に隠れて居るか」と、グツと腕
 まれた佐助は棒といたし、佐オヤツ、此の老翁犬か猫みた様な
 奴だ、乃公が此の暗い處に隠れて居るのが判るとは不思議な事
 じや、夜も目が利くとは妙だ……お師匠様隠れたのではござい
 ません、貴公を驚かそうと云ふ考へで……老アハ、貴様
 今夜は一生懸命になつて居るが、乃公が此處へ来た足音が判る
 か、佐へエ、少とも分りません、老夫では、未だ汝の修業が足
 らぬのだ、何んなに忍んで来ても足音が分る様でなければ駄目
 だ、以後は氣を附けいと、云ひ捨て、立ち歸る、後に佐助は
 判つて堪るものか、お負けに態と跳足で来る仕事なのだ、怪し
 からん事を云ふ老爺だ」と、ブツ／＼云つて居る、偕て其の翌
 晩は餘程氣を附けて居りましたが、何うしても傍迄来るのが分
 らない、俄かにエイツと云ふ聲にハツと背後を振り向く内に、

最ふ肩を強かに打たれて居る、老ユリヤ、其様な事では不可ん
 今夜も乃公の足音が分らぬか、唐朝の公治長は鳥の啼聲さへ分
 つたと云ふ位い、人間は心眼と云つて、心の眼を開いて居れば
 何んな小さい物音でも聞へ、鼻を摘む様な真暗の中でも、歴然
 と見へるものだ、貴様は後に目はないか不自由な奴だ、前にば
 つかり目がある人間は世の中に深山ある、四方八方に目を配ら
 なければ蒙い者には逆もなれん、氣を附けろツ」と、叱り飛ば
 して歸つて仕舞ふ、佐助は茫然として居りましたが、魅て氣を
 取り直し、佐フ、ン、妙な事を云ふ老爺だ、鯨や比良目じやア
 あるまいし、後方に目があつて堪るものか、其様な人間があつ
 たら夫れこそ怪物じや、然し大方油断をするな八方へ氣を附け
 ろと云ふ事であろう」と、斯様な鹽梅で以つて、毎日毎夜一通
 りならぬ稽古を受け、殆んど三年ばかり修業をする、今夜一通
 や佐助も全たく其の極意に達し、暗夜でもアリ／＼と物が見え

かして天晴なる少年を見出し、此の術を譲らんと思へども、目
鏡に叶ひしもの背てなし、然るに三年以前當山中を通行せし際
其の方身輕の働きたと云ひ、武術に熱心な殊勝の心掛け、我れ
ながら心密かに感心の餘り、斯かる少年に我が忍術を授ける時
は、所謂鬼に金棒天下に敵なしと心得、夫れとはなく武術を仕
込み、其の上夜分に當つて忍術を授けたのである、最早汝の腕
前ならば、水通、木通、金通、土通、其の他あらゆる術を行ふ
事が出来る、此の上からは身の行ひを謹み、良き主を撰んで奉
公せよ、屹と天下に其の名を現はすは必定である』と、聞いた
佐助は益々平伏いたし、佐ハ、ツ、斯は有り難き御言葉、三ヶ
年の永の年月、日夜御教導下されし御恩は、海よりも深く山よ
りも高く、お禮は言葉に盡されませぬ、今後は身の行を謹み、
師匠の御名を汚す様な事は仕らず、天下に其の名を揚げる事を
心掛けるでございませう』と、三拜九拜して不圖顔を上げる

斯はソモ如何に老翁の姿は、何れに參られしや更らに其の影も
見へません、流石の佐助もハツと思つて四邊を見廻はして居る
と、何處ともなく聲あつて、老ヤア、佐助驚く事勿れ、最早之
れが今世の別れである、折があつたら、悴山城守に對面いたせよ
其の時の印に之れを取らずと、ハツタリ前に落ちたる鐵扇
之はと佐助は驚いて、件の鐵扇を手に取り上げて見ますと、
十三本の骨の立派な鐵扇、親骨は銀の象眼を以つて、振り下す
の下の深見川、踏み込んでこそ浮む瀬もあり』と、武術の極意
が刻んである、佐助は押し戴いて、佐ハ、ツ、師匠の御遺品と
して、肌身離さず所持いたすでございませう、夫れにしても今
一度御顔を……』と、云ふ時、又も聲あつて、老コリヤ佐助、折
角五ヶ年の間習ひ覺へし忍術も、身の行い悪ければ術は破れて
役には立たぬ、吳々も忠孝の道を忘れなよ、最ふ左らばだ』と
云ふかと思へば、ハツと立つたる白雲と共に、師匠白雲齋は雲

助 佐 飛 猿

好いので祭例も結構じや、小ハ、左様にございたす、然しお
お早ふございませす、父オ、小夜か、誠、早、丁度、お父上
氣に、佐助の姉、小夜は父、佐太夫の居間へ出て参り、小お父上
の祭例と云ふので、鷲塚の家内一統は朝も早ふから目を覺す、
く猿や鹿を相手にして、遊び戯むれて居る、處が今日は氏神様
の祭例と云ふので、鷲塚の家内一統は朝も早ふから目を覺す、
好い天氣の上、祭例と來て居ります、人の心は、何となく陽
氣に、佐助の姉、小夜は父、佐太夫の居間へ出て参り、小お父上
お早ふございませす、父オ、小夜か、誠、早、丁度、お父上

助 佐 飛 猿

や日本武術の聖と呼ばれたる、後にト、傳と相成つたる塚原小太
に傳授をいたしたばかりで、外に門人は取りません、左ればに
を極めたる人で、此の白雲齋は生涯の間、實子山城守と佐助
て居ります、其の實山城守よりも實父、戸澤白雲齋こそ極意
澤山城守が工夫なしたる妙術であるとは、専ら世間に響き渡つ
して歸つて來る、然るに其の頃、忍術と云へば、攝州花隈の戸
ざれば、總て籠堂へ取つて返へし、夜具引つ擔いで我が家を差
として立ち、躑躅籠堂へ取つて返へし、夜具引つ擔いで我が家を差
すに、教へを受けたる、師匠、戸澤白雲齋に別れるに忍びず、悄然
只此の鐵扇をお師匠様じやと思つて、常に肌身離さず持つて居
るより、外に仕方がない、と、流石の佐助も、三ヶ年の目の目も
ず、教へを受けたる、師匠、戸澤白雲齋に別れるに忍びず、悄然
と、立ち、躑躅籠堂へ取つて返へし、夜具引つ擔いで我が家を差
ざれば、總て籠堂へ取つて返へし、夜具引つ擔いで我が家を差
して歸つて來る、然るに其の頃、忍術と云へば、攝州花隈の戸
澤山城守が工夫なしたる妙術であるとは、専ら世間に響き渡つ
を極めたる人で、此の白雲齋は生涯の間、實子山城守と佐助
に傳授をいたしたばかりで、外に門人は取りません、左ればに
や日本武術の聖と呼ばれたる、後にト、傳と相成つたる塚原小太

父上御参詣なればお連れなさつて下さいませ 父ウム左様か、乃公は少々用向があつて、後程でなくば行けないが、母と佐助と三人でお詣りをしては何うじや 小ハ、佐助は最う何處かへ遊びに出まして居りません、左様なれば母上と御一緒に参りませう 父オ、夫れが宜かろうと、其處でお小夜は母親に此の事を話し、充分服装を飾つて一人の下女を供に連れ、都合三人連れで我が家を立ち出で、樂しそうに笑ひ興しながら、氏神様のお社差して参詣する、應て氏神の手前此方になりすと何んしろ祭例の當日でございすから、掛茶屋がズラと建て並べ、老若男女は何れも腰を掛けて、茶を呑み往來の雑沓を眺めて居る、何を云ふても村方では日頃信用のある郷士惣塚佐太夫の奥様と息女と云ふので、唯一人として尊敬しない者はございませぬ △イヨ、奥様に御参詣でございす誠結構な天気様で…… 奥ハ、之れは村方の衆、最

うお歸りでございますか、御免遊ばして……と、一々挨拶も丁寧に、今しも茶店の前を行き過ぎんといたしますと、お話し變つてズツと向ふの茶店で、七八人の道樂者が表の床机に腰打ち掛け、△サア、親分烟は出来やした、最つとお遣りなさい、親オ、乃公は最ふ充分酔つた、手前等遠慮は入らねへ、確かり遣れよ、□ヘエ、有り難ふございす、ジャア呼ばれませうと、ガブリと四邊構はず、傍若無人に酒を煽り立て、居る折柄、丁度通り掛つた惣塚の三人連れ、シロリ之れを眺めた此方の一人は、界限での嫌はれもの、強談の藤太と異名を取つたる、悪漢無頼の曲者でございす、藤ヤイ野郎共、今其處を通る女が、惣塚の辨天娘と云ふのだらう 子ヘエ、左様です、藤ジャア、一寸呼び込んで酌をさせろ…… 子テモ、親分夫れは餘まり…… 藤ヤイ、何が餘まりだい、搦ふ事はねへ乃公が氣に入つたのだ、早く呼び込めいと、餘りの亂暴なる

の背後へ身を嫁す、母親は柳眉を逆立て「オヤ、何を爲さい
 ます、此の娘には妾と云ふ母が附いて居りますぞへ、お前さん
 等の酒の相手は眞平御免衆むりませう、ハイ左様なら……」と
 又も行かんとする奴を、今度は強談の藤太が、猿臂を延して母
 親の胸倉グツと引つ掴み「藤太、姉女の儼にズベコベと能く
 口喋る奴だ、娘を渡せば宜し左もない時にア承知しねへぞッ」
 と、理不盡にも力に任せて捻じ倒さんといたしますから、無茶
 苦茶者に掛つては母親も堪らない「母ア、若し、何を爲さいま
 す、其の手を離して下さいませ」と、互ひに争つて居るを見て
 娘のお小夜も堪らず、下女と共に恐るゝ「夫れへ進み出で、娘
 若し親分様、何うぞ母上をお許しなさつて下さいませ……」と
 青くなつて詫する奴を、又も藤太は左りの手にお小夜の腕首取
 るが早いから藤「エ、イ、手前の様な老婆にア用は無えのだ、何
 うなと勝手しやアがれ」と、ドンと母親を突き飛ばし、取り

言葉に、子分も少々魔誤附いたが、何んしろ向ふ見す連中の事
 だから、二三人の子分はバラバラと夫れへ現はれ出で、三人の
 行手に立ち塞がり「子分はヨ、鷹塚の奥様にお嬢様ですか、サ
 ア何うかお這入り……親分が一寸其の……母「オヤ、之れはし
 たり何方様かは存知ませんが、何か御用で……子「エへ……」
 改まつて七難かしい……親分がお嬢様に一寸……母「ナニ、娘
 に御用でございませうか、子「左様だ、親分が一杯差し上げたいか
 ら、是非呼んで来いと云ふのだ、母「夫れは、御深切は忝な
 う存じます、が見す知らずのお方様に御酒を呼ばれる筈もなし
 夫れに氏神様へ参詣の途中でございませうから、眞平御免衆むり
 ます」と、其の儘行き過ぎんとすると、バラリ飛んで出た強談
 の藤太は、笑出行手に立ち開張り「藤「アハ、……、コオ阿母
 ア……手前に云つてるんじやアない、此の娘に用があるんだ」
 と、グツと其の手に取りに掛ると、お小夜は吃驚、アレーと母

絶る下女のお竹を足を擧げてハツタと蹴倒し、否がるお小夜を引つ立てよ、情け用救も荒々しく、無理無体に茶店へ差して引摺り込まん、権幕なり、サア此の場の落着は如何相成りませうや、ソハ又次回のお物語り……。

第三回

可哀、強談の藤太に引つ掴まれて、アレーと悲鳴を擧げて泣く、叫んで居る、夥多参詣の群集は此の体眺めて、△オヤツ、誰か口を利くも、奥様は突き飛ばされ、女中迄蹴倒されて……誰か口を利くも、誰あつて挨拶をするものはない、甲何うも、お氣の毒じやが滅多に仲裁なんかしやうものなら、目敵に取られて強談られるよ

障らぬ神に祟りなし、濟まん事だが知らぬ顔で居るに限ると、他人の事より我が身の上、皆々後の祟を恐れて一人も飛び出す者が、之れは此の儘であつたならば、憫れお小夜は悪漢其の手を擡つて、如何なる憂目を見るやも計り難しと云ふ危機一髪、群集の頭の上をピョイ、踏み越へながら飛んで来る一人の少年あり、群集は頭を踏まれて吃驚いたし、△オヤツ、痛い、頭を踏むとは怪しからん、△万公は、肩を踏まれた、一体何奴だ、佐助でございますから、△イヨ、佐助坊様、待つてました、確りおの上を飛び廻ると思つた、□佐助坊様、待つてました、確りお頼み申しますと、俄かにワアと喜悅の聲を擧げる、佐助は例の身軽な妙術を現はして、頭肩の差別なく踏み越へ、漸々茶店の前へ乗り込み來たるや、ヒラリ大地に飛び下りて怒

りの大音張り上げ、佐、強談の藤太奴万公の姉上を何とす
 るのだ、今氏神の社で聞いて居れば、姉上に酒を酌をさすとは
 能くも吐した、其の上ならず、上を突き飛ばし、下女のお竹迄
 も蹴倒すとは不埒至極、サア勘辨ならん覺悟しろッ」と、突然
 も蹴倒すと掛り、姉を掴んだ藤太の腕首グツと掴み、力に任せ
 パツと躍り返せば、藤太は今迄の高言に似もやらす、藤、ア、
 て逆手に捻じ返せば、藤太は今迄の高言に似もやらす、藤、ア、
 痛いく、コン畜生ッ………巫山嵐た………佐、エ、イ、汝等の如
 き奴は以後の見せしめだ、シタバタ騒ぐなッ」と、ヤツと一聲
 肩に擔いだと思つたら、傍へにあつたる切石の角へ向けて、微
 塵になれと頭顛と投げ附けた、何條堪りません、惡漢無頼の
 強談の藤太は、腦天を打ち砕かれ、ウンと云つたが此の世の別
 れ、脆くも呼吸は絶へ果てた、此の体を見て取つたる七人の子
 分は突つ立ち上り、各自に長刀を抜き放ち、一同「オ、親分を投
 げ殺しやアがつた小粹奴、覺悟しろい」と、前後左右より斬り

込んだ、佐助は阿々と打ち笑ひ、佐「アハ、ハ、ハ、汝等も親分の
 供がしたのか、小癩な真似をするなよッ」と、エイッと云つ
 たと思つたら、佐助の姿は俄かに消へて無くなつた、子「オヤッ
 何處へ行つたんだらう、ハテ面妖な………」と、七人の奴は迂路
 〳〵と四邊見廻はして居る、ムルト佐助は茶店の屋根の上から
 ボン、と手を拍き、佐「アハ、ハ、ハ、此處じや、此處迄御
 座れ、甘酒呑ませ………」イヤ之れを聞いた七人の奴は地団踏ん
 で、子「ウム………」忌々しい奴だ、鳥じやアあるまいし、其處迄
 飛んで行けるかい、サア下りて来せ」と、ワイ、騒いで居
 る處へ、バツと飛び下りたる佐助は、一人の長刀を手早く引つ
 手繰り、ヤツとばかりに水も堪らず斬り倒し、返す刀に左りの
 一人を胴体深く斬り込んだ、「ソレ、斬つたぞ遣つ付けろッ」と
 と、残り五人は隙間もなく打ち掛る奴を、佐助はヒラリ、と
 飛び蹴し、又も二人を斬り伏せた、三人は斯は敵はんと逃げん

ハ、この強談の藤太と云ふ奴は、町人や百姓を苦しめる悪漢で、夫れゆへ何時かは打ち懲りて遣らうと思つて居たのだが、人々の愛を無くすや姉様を捉へて無禮をするとは悪くき奴、依つて後の憂を除く爲めに、一思ひに遣つ付けて仕舞つた、之れで村内の者も喜悅ぶであらう、サア此處構はず歸りませう」と、二人を捉げたる儘、平氣の平左で談して居る、参詣の群集は祭禮などは其方退けにして、ワアと佐助の周囲に押し掛けて参り却々悪徒で、助坊様、氣味の宜い事をして下さつた、此奴等は却々の悪徒で、助坊様等は度々苛められました、乙左様だ、此奴等が何時迄も居つては、村内は次第に衰微する一方です、何うも有り難ふ存じます」と、群集は異口同音に賞め讃しなが

とするを、走るに妙を得たる佐助は、背後より追ひ詰めて一人をバラリズンと斬り倒し、残り二人の刀を叩き落し、左右の腕にグット掴み、佐ヤイ、汝等二人は後の證據に暫らく生命は預けて置く、サア此方へ來せい」と、二人を宙に提げて茶店の前へ戻つて参り、佐ヤア、母上も姉上も何處もお怪我はございませんか、コレ竹や酷い目に遭はされたが、最ふ心配するな」と慰められて三人は漸々胸撫で下し、母オ、佐助好い處へ來てお呉れだ、お前のお蔭で小夜も助かつた、之れほど嬉しい事は無い、小ホソに佐助、妾は何うなる事かと思つて、生きたる心地も無かつたわい、竹若し坊様、色々有り難う存じます、夫れに附けても貴公のお蔭い事は、常から薄々聞いては居りました、今目の前で初めて見まして、妾は嬉しふて、身体がゾクゾクいたします」と、早や投げられた痛さは打ち忘れ、頼りに佐助の働きを賞めて居る、佐助は莞爾と打ち笑ひ、佐ハ

サア、母上も姉様も歸りませう、此奴は生證據人ですから、私
しが提げて代官所へ連れて行きます」と、母と姉とを慰めて、
今しも其の場を立ち去らんとする處へ、報知せに依つて代官所
役人が乗り込んで参り、却つて母と姉を助けられた孝心深い所業であ
には少しも罪はない、却つて母と姉を助けられた孝心深い所業であ
ると分つて、役人共も今更ながら佐助の働きを感じ、役イヤ、
少年ながらも佐助は深い、六人を叩き殺し、二人を證據人に生
捕るとは天晴なる腕前、最ふ御身達には咎めはない、安心して
引き取つて頂きたい」と、言葉さへも鄭重に、佐助は六人の人
殺しをして賞められて居る、何んしろ強情の藤太と云へば、代
官所にも持て餘して居る悪漢無類の代物でありますからして、
結局厄介者が片付いたのを喜悅で、遂に此の一件は殺し得殺さ
れ損と相成つた、其處で母親始め小夜佐助の三人も、役人に厚
く禮を述べ、夫より氏神様へお詣りを済ませ、我が家へ差して

戻つて来る、サア此の事が四方へバツと擴がると、界限數ヶ村
の町人百姓共は、皆々胸撫で下して打ち喜悅で、△何うも、
塚の佐助坊様は豪ひもんだ、未だ十五才位の年頃で以つて、
方の厄病神を退治して下さるとは、恐ろしい、佐助坊様は屹度
に居ると云ふの有様、父親佐太夫も怪を賞められて内心密か
に嬉しく、佐太夫も矢張り何處か遠つて居ると思つたが、
する奴じや、此の向で行つたら後には天に名を揚げる者とな
るであらう」と、此の向で行つたら後には天に名を揚げる者とな
は、相變らず無頓着で、只毎日、鳥居時へ分け登り、飛んだ
り跳ねたり、腕白な遊ばかりをいたして居り、或日の
こと、名主善右衛門が村内軒別へ觸れて廻り、名明日は、上田
の御領主眞田村の若君三郎様があつては相成らぬから、明日一
お越しになるのじや萬一粗相があつては相成らぬから、明日一

買かれたかと思ひの外、斯はソモ如何に飛び来る矢を右手に確
かと受け留めたる件の猿は、幸村を眺めて剛々と嘲笑つた、流
石物に動せぬ幸村も此の体見るより或は驚き且は怒り、幸
此奴畜生の分際として、我が射て放せし矢を、右手に受け留め
るなぞとは不埒千萬、イデ今度こそは……と、又も矢継早に
二の矢を番へ、勢ひ鋭く射て放せば、同じく左手に丁と受け留
めて、相變らず怪しき聲を發して嘲笑つて居る二本迄も遣り損
じて、幸村怒り心頭より發し、幸「ヤア、武田家の旗下大名に於
て、今孔明と呼ばれたる真田安房守昌幸の嫡子與三郎幸村に向
つて小猿な振舞推参なり」と、大喝一聲ハツタとばかり睨み附
くれば、偕ても不思議や件の猿は、幸村の威勢に恐れなしたる
ものをなるか、技の上より頭顛倒と大地へ墮落ち来たり、ブル
を擧げて、接の上より頭顛倒と大地へ墮落ち来たり、ブル
震へながら幸村の足下に平伏した、此の体に巨等一統は奇異の

思を爲し、中にも三好清海入道はツカ〜と進み寄り、三「オヤ
ッ、此の畜生奴ッ、乃公等でも受ける事の出来ない若様の矢を
二度迄も美事に受け留め、天晴武術の心掛けある妙な猿だと思
つたが、到頭若様の威光に敵はないで睨み殺められ人間らしい
真似をして、助けて下さいと云はぬばかりに、手を合してお辭
義をするとは可笑な畜生だ、若様斯様な者は叩き殺して、煮て
食つて仕舞いませう」と、無茶苦茶者の清海入道に掛つては堪
らない、猿は首筋を引つ掴まれ、咄壁拳骨で殴り据へられんと
する危機一髪、其の折柄、忽ち頭上よりヒラリ飛び下りたる一
人の少年あり、兎角の猶豫にも及ばず、清海入道の手許へ躍り
込むと見る間に、振り上げたる利腕ムツと掴み、ヤツと一聲諸
共に、左しも大兵肥満の清海入道を目よりも高く差し上げ、少
ヤイ坊主、乃公の朋友を煮て食ふとは何事だ、汝こそ酷い目に
遭して呉れん」と、傍への松の根元望んで、微塵になれと投げ

て居る、漸々松が根元から揺ぎ出したかと思ふと、少年は宛で
 猿の梢を傳ふが如く、枝から枝へ飛び移り、少ヤア坊主は、
 其處には居らんぞ此處だ、云はれて三好清海入道は、
 上を見上げて切齒をなし、三オ、忌々しい小忤だ、
 も助けは置かぬ、と、又も其の樹へ抱き付き、
 ながら角力の如く、漸々樹が揺ぎ出して、ヒヨイと上を見
 早や少年は隣りの樹へ移つて居る、流石大力自慢の清海入道も
 最う力も根も盡き果て、夫れへ平倒り込むなり、
 三ア、苦しい、弟貴様、見物して居るとは、
 ん奴だ、海野、望月、窟山、朋友、甲斐の無いら、
 が、笑つて居られるとは、餘り生じやアございませんか、
 口、忍痴を盗し初め、此の時迄始終、
 て居られた幸村殿は、幸アイヤ、清海入道の立腹は、
 が、彼の少年は如何にも身軽な振舞で、ある、先づ怒りを鎮め

附けた、投げられた筋斗打つて投げ出されたが、武術の威徳を以つ
 て、中途でヒラリと身を翻へしスラリと立ち上つて眼を怒らし
 三オヤツ、天から降たか地から沸いたか、僅か十四五才の小
 悴奴が、人も恐るゝ三好清海入道を取つて投げるには、
 り、汝ッ勘辨ならん覺悟しろ、と、突然少年に掴み掛つた、
 少年は彼方此方に身を躲す其の早さ、流石負けん氣者の清海入
 道も彼方へウロウロ、此方へウロウロ、三ヤ、
 敏い……オヤ姿が消へて無くなつた……と、
 見廻して居ると四五間向ふの松の梢に腰打ち掛けて、少アハ、
 、坊主此處じや」と、天狗の様な事を、ヒヨイと見揚げた清
 海入道は、三オヤ、宛で天狗の様な事を、ヒヨイと見揚げた清
 共引き倒して呉れんと、金剛力を出してヤッウーンと力味返つ
 の樹の幹に雙手を掛け、金剛力を出してヤッウーンと力味返つ

るが宜かろうと、清海入道を押し寄めて置いて、何か胸中に
黙頭きながら「幸ヤア、夫れなる處の少年尋ね問ふべき仔細
り、苦しむない之れへ来たれ」と、聞いた少年はヒヨリ身を
翻へすと飛鳥の如く身を躍らせ、應てスツクと幸村の面前へ下り
立つた、幸村を始め郎黨家來に到る迄、今更ながら此の少年
の振舞を見て、或は驚き又は感じ、今の今迄ブン／＼怒つて居
つた清海入道迄が俄かに手を拍つて賞め讃やし、清海「イ
類の生れ代りではあるまいし、身体が軽い事は輕業師も遠く及
ばん、夫れにしても奇態な少年もあつたものだ」と、面々は呆
れ返へつて少年の周圍を取り捲き、珍らしそうにワイ／＼と、
見入つて居りますと云ふ、愈々之から少年佐助が、幸村と主
従の約束を取り結びますと云ふ、益々出で、益々面白き一條
は次回に於いて口説じます……

婦女は己れを愛する者の爲めに扮装り、勇士は己れを知る者の
爲めに蓋すとかや、真田與三郎幸村は圖らずも鳥居峠に於いて
不思議の少年に出會い、幸「フム、何うも奇態な少年である、彼
れを我が家來といたし置けば、何か都合の宜い事があるであ
ろう」と、斯様に思つて居られると、此方の少年佐助も、幸村
の人品骨格を見て自然と敬い慕ふの心を起し、佐「ハ、ア、之れ
が真田家の麒麟兒と云はれた與三郎幸村殿だな、乃公の朋友の
猿奴を睨み落した處なんぞは、逆も普通の人間では出來ない仕
事だ、師匠白雲齋先生が仰しやつた通り、主を持つなら斯ふ云
ふ御方を主人と仰ぎたいものだ」と、密かに胸中に覺悟を定め
幸村の言葉を今や遅しと相待つて居る、此の時に幸村は言葉と
かに「幸ヤア、夫れなる少年、汝は何れの者にて名は何と申す

第四回

少「ハッ、私は此の麓に住つて居ります、郷士惣塚佐太夫の一人、子佐助と申します。幸フム、何處ともなく人品賤しからずと思ひしが、借ては郷士の俸なりしか、シテ汝の身軽な振舞は天然自然に習ひ覺へしや、まつた誰かに教はつて斯く鍛練なしたか何うじや、佐ハッ、實は云々、斯様くでございまして、師匠戸澤白雲齋より譲り受けましたる術の威徳に依る處でございす。幸フム、然らば我が國で忍術の大名人と呼ばれたる戸澤白雲齋先生より習ひ受けし妙術なるか、道理で比類稀なる働振りだと思つた、夫れに付けても猿猴の腕前却々天晴れ、定めて汝が仕込んだ仕事であるう、佐ハッ、其の猿猴は私が七八歳の砌りより互ひに朋友の様に仲好くいたし、毎日遊び戯れて居つた爲め、自然と物を受けける術を覚えて、今では弓矢を以つては逆も仕止める事思ひも依りません。幸フム、畜生と雖も鍛練

なしたる時は恐ろしいもので有る、何うじや、佐助とやら予が家來となる氣はないか、佐ハッ、私も師匠の言葉に従ひ、何うかして天下に名を揚げたいと思つて居ります、お差し支へなくば家來にして下さいませ。幸オ、能く申した、其の方は天晴物、の役に立つべき人物と見抜いた、此處に居る六人は予が大切な家來である、汝を加へて七人といたし予が家の七人勇士といふ、たすであらう、ヤヨ穴山岩千代、海野六郎、箕十造、望月六郎三好兄弟、此の後は之なる佐助を兄弟同様に思つて有り取りせよ」と一同の家來に披露に及ばれる、スルト三好清海入道は先刻の意根がありすから、三コリヤ、佐助、貴様此の後は乃公等を兄貴だと思つて、へイ、ハ、ハ、と云ふのだぞ、萬一少年の癖に我々の言葉を背くと承知しないぞ、能く氣を付け笑つて、佐アハハハ、年齢は兄貴だが、腕前は此方が貴兄だ

助 佐 飛 猿

ぞ 三「オヤッ、又小癪な事を吐しやアがる、ジャア此處で一々
我々六人と腕前比べに及んで遣らう、若様如何でございます、
幸「ヤ、夫れ面白からう一人、佐助に立ち向へ、然し決し
て卑怯な振舞は相成らんぞ 六人「イヤ、心得ました」と、狩倉
なぞは其方除けに、六人の勇士は互ひに身仕度に及んで、先づ
第一番に三好伊三入道が飛んで出た、佐助は別に身仕度もせず
手頃の檜の棒を掲げて夫れへ立ち向ひ 佐「チア、坊主の叔父さ
ん来い 伊「オヤ、乃公は未だ叔父さんと云はれる年ではないぞ
汝「此の小倅奴ッ」と、伊三入道は最初から怒つて掛り、エイ
ヤッと喚き叫んで、只一撃ちと打ち込んだ、佐助は心得たりと
發止と受け留め、暫らく上段下段と秘術を盡して涉り合つて居
りましたが、佐助は少年ながら伶俐な男でありませうから、佐
てよ、此奴等を腹り居へると云ふと、返つて悪まれて都合が惡
い、一つ驚かして置けば澤山だ」と、斯ふ思ひましたる處より

助 佐 飛 猿

今しも伊三入道は勢ひ烈しく、ヤッと打ち込んだる棍棒をバツ
と跳ね返して置いて、エイと大地を叩いたと思つたら、斯はソ
モ如何に、佐助の姿は俄かに消へて無くなつた伊三入道は迂路
くと、伊「オヤッ、ハテ面妖な……何處へ來せたのであろう
二三丈もあろうと云ふ岩角に腰打ち掛け、師匠より譲り受けた
る鐵扇をサツと開き、平氣の平左で頻りに風を入れて居る、イ
ヤ伊三入道は之れを見て地面を踏んで口惜しがり 伊「ヤ、何
時の間に彼處へ飛んで行き居つたか、ヤイ佐助奴、逃げるとは
卑怯であらう、早く此處へ來い、今度には許さんぞッ」と、ウッ
くと力味んで居る、幸村は此の体眺めて何々と打ち笑ひ 幸
アハ、ハ、伊三入道最ふ宜い貴様は退れ 伊「イヤ、未だ勝負は
相附きません、是非此の棍棒を彼奴の頭にお見舞ひ申さねば
……幸「ハ、ハ、ハ、怒つた處で貴様には佐助程の妙術はあるま

助 佐 飛 猿

るゆへ今日より猿飛助幸吉と名乗るべし」と、至極満足の体にて夫より態々佐助の父親佐太夫を訪ね、委細を打ち明けて家來に申し受けたい由を話し込むと、佐太夫も外ならぬ興田與三郎幸村公の懸望と云ひ、佐助の出世にもなる事として快く承諾いたしました。佐太、ハイ、何卒只今よりお召し連れ下さいまする様願はしふ存じます。手前の屋敷は姉の小夜に養子を貰ひ、夫れに跡目相続をさせますれば、佐助が居ませすとも別段差支へはございませぬ、コリヤ佐助、其の方は今日より此の若殿様を御主君と仰ぎ、天晴忠義を盡さねはならぬぞ、父母姉弟は無きものと、思つて、只管御主君を大切にいたせよ」と、両親まつた姉の小夜は懇々と云つて聞かせる、佐助は嬉しいやら、悲しいやらで云ふても未だ十五才の少年、初めて父母の膝下を離れるのでございませぬ、御教訓は決して忘れないたしませぬ、何うか御機嫌能くお暮し下さいませ、屹度出世をして家を興し名

助 佐 飛 猿

いア勝負に相引きにせよと云はれて伊三入道は不承無承に引き下る、續いて青海入道は弟の仇と飛んで出たが、之れも以前の如く、佐助の忍術に掛つてキリ、舞をさすれ、望月六郎つて引き下つた、其の次ぎには穴山岩千代、寛十造、望月六郎海野六郎と悉く打ち向つたが、何んしろ七八合、ポン、と合したと思つたら、佐助が樹の上、岩角へ飛び上り、樹から樹へ彼方此方と飛び廻るものですから、流石の勇士も何うする事も出来な、六人、エ、イ、思々しい奴だなア、宛で猿が飛び廻る様に可笑な真似をして我々を馬鹿にして居やアがる夫れにしても妙な曲藝があるものだ」と、怒るやら呆れるやら感心するやらで六人の豪傑は佐助一人に掛つて、持て餘して居ります、幸村殿も悉く感心いたされ、幸イヤ、思つたよりも天晴腕前、戸澤白雲齋が仕込んだ程あつて、末頼もしき少年である、ヤ、佐助其の方は今より鷺塚の姓を改ため、猿の如く飛び廻るに妙を得て居

村の補佐となつて、能く忠勤を抽んで、呉れよと忝なきお言葉
 が下つた、其の上常座の引出物として、三池傳太光世殿への一
 刀を給はる、佐助は面目身に餘つて感銘に徹し、佐ハツ、數
 ならぬ私しを左程迄に思召し下さる御恩は死すとも忘却仕りま
 せぬ及ばすながら若君の御爲めに、粉骨細身水火も辭せざる決
 心でございます、と、勇ましき其の一言に、昌幸公も至極御
 満足の体にて、尙ほ色々の物語りに及ばれ、佐助は上々の首尾
 にてお目通りを下り、自分の居間と定められたる一室に引き取
 つた、翌日より佐助は他の六勇士と共に幸村公の御近侍役を勤
 め、始終お側に付き切つてお手をいたして居りましたが、何ん
 し、ろ、年こそ十五才ではあるが、忍術の奥義を極めたる猿飛佐助
 殊に、大無双にして、腕前も浅からず、來て居りますか
 ら、幸村は、大變、佐助を寵愛いたされ、始め、彼の屋根に鳩が一羽

を揚げて御覽に入れます」と、勇ましき其の言葉に、何れも安
 堵の思を爲し、父親佐太夫は幸村に向つて呉々も御願ひ申し上
 げ、着、相成つた、幸村の喜悅は一方ならず、幸イヤ、今日は太
 郎、お話し申さねば相成らぬ」と、猪鹿の得物は士卒に擔がせ、
 した得物をして之れ程結構な事はない、早く立ち歸つてお父上
 にお話し申さねば相成らぬ」と、猪鹿の得物は士卒に擔がせ、
 正々堂々と、信州上田城へと歸城に及ばれ、直様父安房守昌幸
 の目通りへ出で、云々、斯様と物語り及び、猿飛佐助を引
 き合はせる、昌幸公は之れを聞かれて大いに喜び、昌フム
 夫れは良き家來を見付かつたものだ、萬幸は得安く一將は得難し
 當、時、戦國の時代には斯かる人物こそ望まされ、昌「ヤ、事の外な
 る御満足、佐助には改めて君臣の杯を下され、昌「ヤ、佐助、
 汝、若、年なりと雖も、天晴、豪傑となるべき人品骨柄、以來は一子奉

出しをしなないのだ、ノオ海野……乃公は猿飛が来たので大いに樂になつた。喜悅んで居るのだ。清ナニイ、何が樂になつたのだ、海ハ、ハ、ハ、左様怒るな、此の頃若様の御用は猿飛一人が引受けて遣つて居るだらう、夫れゆへ我々は結局氣樂で結構だ何も腹を立てる事はない佐助に禮を云はなければ濟まん位のものだ。伊オヤツ、此奴可笑な事を云つて猿飛の肩を持つのだな、考へても見い、我々の家は先君彈正忠幸公より、眞田家の郎黨として譜代の家柄だ、夫れに今更ら不意に飛び出して来た猿の様な人間に下馬を食つて堪るか、幾等彼奴が忍術を心得て居つたつて矢張り人間だ、油断と云ふ事があるに違ひない其の油断を附け込んで一つ思ふ存分遣つ付けて置くのだ、左様すると以後我々に頭が上るまい、何うだ旨い計略だらう、望オ、左様だ一度は凹まして置くのも宜からう、シテ油断とは何うするの

遊んで居る、彼れを捕へて来い。佐ハッ、心得ました。直に掴んで来る。幸コリヤ佐助、其の松の頂へ登つて飛び下りる。佐ハッ、長まりました。他人の出来ない事を容易く遣るものですから、大層幸村の氣に入つて、今は古參の六勇士を凌いで、幸村は佐助でなければ、夜が明けない様に相成つた、スルト六人の豪傑がソロ／＼不平を云ひ出し、中にも横紙破りと云はれたる、三好清海入道と弟の伊三入道は承知せず、或日六人が密かに一室に會して、清イヤ各々、彼の佐助奴が来てから若君は我々には有つて無きが如く、只猿飛と云つて在らせられるが何んと癪に障るじやアないか、寛ウム、左様だ、乃公も内々其の事を思つては居るのだが、奴は怪物見たやうな男で、聞ても眼が見へる、三丁四方で話して居る聲は聞へると云ふ變り者だから、迂闊な事をしては返つて計略の裏を掻かれる恐れがあるから、一番凹まして遣らうとは思つても未だ能く手

だ、清々、今夜は彼奴の寝呼吸を窺ふて部屋へ忍び込み、六人が夜具の上より押へ附け、雁字搦目に引き縛つて、若君のお次の間へ投り込んで置こうでないか左様すると若君も少々気が附いて我々にも御用をお命じにならぬらん、正殿六人の衆傑が掛つて、夫れ位の事が出来無い事はあるまい、何うだ穴山「オ、其奴は旨い計略だ、乃公は大賛成だが、迂闊な事を遣ると反對に失策るよ、奴は眼が好く見へるのと、耳が好く聞へるのと、身軽い男だから一筋縄では行く奴ではない、三「ナア、彼れも人なり我れも人なり、左様恐れる程の事は決して無い、萬事は乃公に任して置けと、六人は別に悪気があつて無考ではないが一度回まして置かねば僻になると云ふ處より、密かに打ち合せをして、夫れとはなく其の夜の來たるを相待つて居りますすと云ふ、ナア此の落着は何うなりませうや實に面白き一條は、次回に伺ひ續けまする……

第五回

人を呪はゞ穴二つ、六人の衆傑は新參の猿飛佐助が、殊の外幸村の氣に入つたるを忌々しく思ひ、密かに手段を示し合はして其の日の暮れるを待ち受ける、何んしろ戦國の時代で、人の氣は自然と殺伐な事を好む頃合でございませうから、少しく氣に入らぬと、或は袋叩き蒲團蒸し、色々な悪戯を遣つたものでございませう、殊に之れ等六人は眞田家名題の荒小姓で、主君とは云へ幸村とは、兄弟同様に居る間柄でありますから、一人が斯ふと云ひ出したら否でも應でも賛成をするが定法の様になつて居る、伊三入道と云へば、大變老人の様に聞へますが、決して左様ではございませぬ此の兄弟は幼年の様に聞へますが、決して夫れが爲めに寺の小僧となつて居つた、夫れを安房守昌幸公が

らぬ顔で、之れも日の暮れるのを待ち受ける、左様斯ふ中
其の日も漸やく暮れ果て、宵の間は七人の連中其の幸村公の
御前に居つて、或は腕押し、座り角力、頭叩き、其の他戦争の
物語りなぞをして、主従は楽しく笑ひ興じて居りましたが、夜
の亥の刻頃、方今の十時の刻限と相成ると、夫々お暇を申し上
げて、當直を除くの外は城内の已れの部屋へ引き取つた、
三好清海入道外五人は、口には云はねど互ひに目と目を見合は
せて、『三己れッ、猿飛佐助今に見らう、グル〜猿飛佐助も胸中に
るんだ』と、ベロリ舌を出して笑つて居る、猿飛佐助も胸中に
成す様、に思つて居るが、今の今、何にも知らぬと思つて遣う
と、狐と狸の欺し合、左あらぬ体で自分の部屋へ戻り来り、
夜具引つ被つて寝て居り、陰に響いて物は凄く、世間は森閑とし
も打ち出す真夜中の鐘は、

お聞になつて、天晴物の役に立つべき兄弟を、一生涯坊主で終
らすは惜しい者だと、親の三好丹後春繼が真田家の家來である
を幸ひ、之れに申し聞かせて寺より引き取らせ、兄弟も却々心の
御近侍小姓役に差し出さしたのでございませうが、兄弟も却々心の
掛けのある人物でございませうから、殺した相手の親に濟まない
と云ふので、心は還俗して武士になつても、妻丈けは矢張り坊主
で居りたいと頭はクソクソ坊主で、墨染の法衣を纏ふて其の坊主
へ兩刀を帶し、奇妙な風体を爲し、年は漸々十九才と十七
才だが自ら入道と云つて居るの通り名となつて、皆な清
海入道、伊三入道と呼ぶ様に相成つたのでございませう、
も悪戯の張本人、三好清海入道は、力味返つて日の暮れるのを
相待つて居る、お話し替つて此方猿飛佐助は、早くも忍術の威
徳に依つて、此の計略を見破り、佐ハ、ア、乃公を蒲團巻にす
る積りだな、ヨシ反對に一泡吹かして笑つて遣らう』と、素知

て寝入鼻と云ふ時刻に相成ると、ムククと夜具を蹴つて起き上つたる猿飛佐助は、態と枕許の燈火をブツと吹き消し、左様だ、斯ふして置けば此方の者だ、ハ、ア何うやら廊下の方から足音が聞へ出した、乃公の代りに張本人の清海入道を縛らせ、て遣らう」と、打ち點頭しながら、片脇の壁に倚れて突つ立つて居ると、案に違はず六人は清海入道を真先に立て、部屋入り口へ窺ひ寄り、暫らく内部の様子を探り、耳發て居りました、清海入道は聲密やかに、乃公と穴山と海野とが夜具の四隅を押へる、損じる事は無い、乃公と穴山と海野とが夜具の四隅を押へる、望月と伊三入道は手早くグルグルと轉つて仕舞へ、宜いか、儼然とやア不可ないぞ、五人クム心得た、然し真暗だ、清海入道は暗でも勝手は能く分つて居る、ソレ乃公に頼けい」と、スツと障子を開けて六人は中へ這い込み、シロく、と夜具の方へ捜り寄る、闇の中に突つ立つて先刻より此の様子を見て居

りまする猿飛佐助は、闇と雖も眼が利くのだから、六人の風体を見て可笑くつて堪らない、佐イヨ、六人ながら彼の態は何ふたい、夜這いにも来た様な風体で居やアがる、殊に清海入道の素裸体の上に赤禪を垂らし、向鉢巻して居る處は、イヤハヤ何とも云へたものじやアない、今に自分が縛られるとは自業自得だ」と、嘲笑いながらノソノソと清海入道の背後へ廻り、今しも清海が夜具に手を掛けんとする處を見澄し、突然力に任せてバツと夜具の中へ押し込み、アツと驚き聲立てんとする處を、素早く頭より蒲團を引つ被せた、素より忍術の名人だから、似聲も却々旨い、片手で鼻を摘んで、忽ち清海入道の似聲を出し、佐サア、今だ、押へたぞ、穴山と伊三入道確りしろ、恐闕くしちやア不可ない、穴オ、イ、早くしないと飛び出すぞ、此處だ、二人オ、之れかく、ヨシ来た、ウム此ん

て置けば大丈夫だ、引き取れ、と、五人は其の儘部屋へ立ち歸る、後より尾けて来た猿飛佐助は、五人の喜悅で立ち歸る姿を眺めて、佐アハハハ、朝になつたら驚くだろう、馬鹿な奴もあるものだ、と、自分の居間に歸つて横になり、グウ直宿の武士は初めて床の間の怪しき包みに気が付き、武オヤツ誰か此様なものを此處へ持つて来たのだらう、佐藤氏御存知か、佐イヤ、某は少しも知らぬ、然し何か中でウソと唸つて居るではござらぬか、ハテ氣味の悪い蒲團包みでござるが、シテ何ういたしませう、武左れば、何うと云つて御主君さまに申し上げるより外はござらぬ、我々が居睡りをした落度はあるが、此の儘黙つて居る譯にも参りませう、と、三人は心配いたしながら云つて仕舞ふ方が宜しふござる、と、三人は心配いたしながら

畜生、忍術使いも絲瓜もあるかい、最ふ斯ふなつては逆も駄目だ、シタバタ漢搔くな糞垂れ奴がッ、と、五人は眞逆之れが清海入道とは知りませぬから、思ひ知れやとばかりに、踏み附ける、蹴る、殿する、中には清海入道蒲團で口を押へられ、物言ふ事も聲を出す事も出来ず、ウソと唸つて居りました、到頭夜具共雁字搦目に縛り上げられた、佐イヤ、之れで宜い、擔ぎ込め、宿直の奴に見附からん様にしろ、乃公は後を片付けて置いて直に歸る、五人は目的を達した積りで面白そうに、エツシヨイ、と、五人は幸村公のお次の室へ出て参り、襖の隙間より内部を覗いて見ると、宿直の武士は三人ながらコクリ襖を開き、態と床の間へ件の蒲團包みを据へ、

望月六郎、穴山岩千代、海野六郎、寛十造、三好伊三入道の五人連れ、五ハツ、腕はしき御尊顔を拜し恭悦至極に存じ奉りま
 する、シテ我が君此の包みは一体何んでございませうと、素
 知らぬ顔で尋ねますと、幸村公は莞爾と打ち笑み給ひ、幸
 五人の者目通り太儀である、此の包は云々斯様、で次の間の
 床に据へてあつたとやら、誰かの悪戯に相違あるまいと心得、
 只今解いて中を檢めんと存じ居る處である、六郎「へエ……」妙な包
 みがあつたものでございませう成程何か隠つて居る様だ、佐藤氏
 山本氏三谷氏、御身達はお控へあれ、斯く云ふ海野六郎が内部
 を檢べて御覽に入れ、と、三人を追ひ除けて置いて海野六郎
 はツカ、と進み寄り、今しも繩に手を掛けて、咄嗟引つ解か
 んとする其の處へ、静々と出仕なしたる猿飛佐助、主君幸村公
 に挨拶をいたし、五人を尻眼に掛けて悠々と座に附けば、驚い
 たのは五人の連中、五人を尻眼に掛けて悠々と座に附けば、驚い
 たのは五人の連中、五人を尻眼に掛けて悠々と座に附けば、驚い

此の事を幸村公に言上すると、幸村公も眉を擧め給ひ、幸
 ア、妙な包みを持ち込んだものだ、苦しふない之れへ持て……
 ハツと答へて三人は件の蒲團包みを引つ摺いで、幸村公の目通
 りへ運び出す、幸村公は呢ツと目を附けて居られましたか、幸
 ハ、ア、何か中で唸つて居る様だ、早く包みを解いて見よ、と
 お命じに相成つた、三人は互ひに顔見合はして、佐山本氏、貴
 殿お解きなさい、山イヤ、某は御免蒙むる、萬一解いた處で、
 パツと咽喉笛へ喰い付かれては夫れこそ大變、眞平、
 らば、三谷氏は如何……三ハ、ハ、拙者とても祭の提灯でござ
 る、佐ナニ、祭の提灯とは……三ハ、ハ、お悟りの悪るい門並
 くでござる、佐ハ、ハ、ハ、洒落どころの騒ぎじやアござらぬ
 然らば三人が一處に解こうではござらぬか、二人イヤ、夫れ宜か
 ろうと、臆病者の三人は恐るゝ包みの側に進み寄り、既に
 包を解かんとする其の折柄、ドヤ、と入り込み来たつたる、

うした 眞ハテ面妖な、確かに夜前遣つた筈だが……伊之れ
 は、何うも不思議だ、夫れに附けても乃公の兄貴は何處へ往つ
 たのだらう」と、五人は佐助の顔を穴の開く程眺めて何かブツ
 ンと、嘸き始めた、佐助は可笑しくつて堪らないが、眞面目な顔
 して、佐「イヨ、何時も遅い方々が、今日に限つてお早い御出
 仕、シテ清海入道殿は何う召された、何處かお悪いのではござ
 らぬか」と、尋ねられて五人は極り悪く、望「イエ、其の何んで
 ……之れは愈々分らん、益々怪しからん……と、流石の五人も
 茫然として呆れ返つて居る、ムルト幸村公は不審の顔色にて、
 幸「ヤヨ者共、可笑な挨拶をして居るが、一体何うしたのだ此
 の包には何か曰くがありそうだが、早く解いて見よ」と、主君の
 殿命に、五人は絶体絶命、解かねばならず解けば三好清海入道
 に極つてある、伊「オ、思々しいなア……反對に猿飛奴に一杯
 喰はされたか、之りや困つた事になつて来た」と、手持無沙汰

にモジ、いたして居ると、猿飛佐助は何に思ひけん夫れへ進
 み出で、佐「ハッ、申し上げます、幸何事じや、佐「ハッ、餘の儀
 ではございませぬ、之なる包みの中に何か隠つて居る様に思は
 れます、此の儘解いては興が薄ふございませぬ、一人が何
 であるかと考へて申し上げ、果して其の正体に云ひ當つた者に、
 御褒美をお遣しに相成つては如何でございませう、之れも當然
 の御慰みかと心得ます」と、五人の顔をジロ、眺めて申しま
 すれば、五人は顔よりダラ、と汗を流して、六「オヤッ、猿飛
 奴は意地の悪い事を云ひ出した、縦し之れが三好清海入道と分
 つて居つても、我々は夫れを云ふ事は出来ず、左すれば猿飛奴
 が褒美を取るに極つて居る、遣り損じた上に褒美迄取られると
 は情けない泣面に、此の事だ」と、悄氣返つて居りますと
 明智の幸村も之れには何か仔細ぞあらんと推察せられ、幸「ム
 猿飛の申す處面白し、ヤア夫なる海野六郎、汝より申し立てよ」

助 佐 飛 猿

と、退引きならぬ御言葉に、海野六郎遊面作つて、六「ハッ、某は猿が這入つて居るかと思ひます。幸「ナニ、猿と申すか、フム……次ぎは……」穴「私には、猫であるまいかと……」望「恐れながら狸の様に考へます。算「某は、狐と思ひます。伊「イヤ、兄貴……オツと犬にいたして置ませう」と、苦しうに云つて仕舞つた。幸「ハ、ア、猿に猫、狸、狐、犬と申したな、然らば猿飛助は何うじや。佐「ハッ、私は畜生ではあるまいと睨み居ります。幸「フム、畜生でなくば人間か。佐「ハッ、御意にございませぬ。幸「人間ならば誰と云ふ事も分るであらう。佐「ハッ、判つて居ります。幸「誰じや。佐「イヤ、余人ではございませぬ、三好清海入道かと存じます。幸「ハ、ハ、ハ、ハ、旨い事を云つた、予も其の通り思つて居る、ソレ解いて見よ。ハッ」と答へて佐助はツカクと進み寄り手早く縛の繩を解夜具を引捲るとムックリ飛で清海入道は素裸体で向鉢巻赤袴と云異様の風体餘りの可笑さに幸村公を

助 佐 飛 猿

始め五人の連中も、思はず知らず吹き出して、幸「アハハハ、清海入道は苦し紛れにヤン嬉しやと躍り出しはしたもので、豈に圖らんや幸村公の御前と云ひ、然も白晝の事でございませぬ。ら、今更ら逃げ出す事もならず、糞度胸を据へて俄かの頓智、澄し返つて平伏なし。清「我が君、麗はしき御尊顔を拜し、不肖身に取れ如何ばかりか恐悦の次第、麗はしき御尊顔を拜し、不肖御覽に入れん爲め、態々斯くの通り……」と、暢氣な奴もあるもの、バツと夜具を跳ね除けるや、可笑な身振りをして両手を振り、スタコラサノサと幸村公の御前にも憚らず、ドスンと踊り出した、幸村公も餘りの可笑しさに腹を抱へて、笑ひ崩れて居られる隙を窺ひ、得たりと清海入道は踊りながらお次の間へ飛び出すや一目散に自分の居間へ逃げ歸り、清「ア、苦し

を懐けるのは馴れたもの直様酒肴をお命じになり、打ち寛いで
 御酒宴を催されまつた夫々引手物を下される、七人は今更らな
 がら面目身に餘つて感涙に咽び、清ア、有り難い事じや、御
 主人に迄御心配掛けて相濟まん、オイ猿飛今度の事は忘れて呉
 れ、乃公が發起人で遣つた仕事だ、以來は義兄弟の交りも結ば
 うではなにか、佐オ、如何にも承知いたしました、取るにも足ら
 ん争いから、若君に御心配を掛けては相濟まん、何うか新参の
 某し、氣に入らぬ處もあろうが、目を掛けて引き立て、頂きた
 い』と、一々挨拶に及んだ、其處で七人は互ひに血を吸つて快
 よく義兄弟の約を取り結び、苦樂を共にし、主家の爲めに盡そ
 うと決心した、サア斯ふなつて來ると、新参なれども猿飛佐助
 は、段々と其の名前が高まり、上田城内では若手豪傑七人勇士
 の花方として、人々の尊敬を受くるの身の上と相成つた、然る
 に茲に一つの格事出來、猿飛佐助が益々其の腕前を現はすと云

云ふ奴は年は若い却々容易ならん奴じや、乃公も今迄戰場萬
 馬を往來したが、斯様な目に出喰した事はない』と、溜呼吸を
 吐いて居る、其處で手早く衣類を着替へ、真面目臭つて幸村公
 のお目通りへ出ると、幸ヤ、三好清海入道、裸体踊りの一曲
 は面白かつた、然し之には何か仔細ぞあらん、包ます申し立て
 よ』と、お尋ねになる、何んしろ六人共竹を割つた様な氣象の
 人物ばかりでございますから、昨夜の失策談を詳しく言上に及
 んだ、幸村公は愈々お笑ひになり、幸アハハハ、三町四方は
 蚤が飛ぶのも分ると云ふ猿飛佐助を、計略に掛けんとしても夫
 れは難かしい、人を呪はゞ穴二つと云ふ事がある、以後は七人
 が互ひに兄弟同様にいたし、予が手足となつて働くべし、一視
 同仁汝等七人は我が爲めの大切なる郎黨である、其の旨心得
 て宜かろう』と、何んしろ年は漸々十六才だが、智仁勇三徳兼
 備の若大将、東國の麒麟と呼ばれたる真田與三郎幸村だ、家來

助 佐 飛 猿

然るに此の眞田安房守昌幸公と仰せられるは、武田家に於ては軍師同様の御方でございまして、我が國の孔明張良と云はれた天晴人物で、天文地理人情風俗、日本國中の事は何に一つとして知らぬ事のないと云ふ位い、博學智識のある大將であります。が、取り分け一子幸村は、父に優ろうとも劣らないと云はれる位の大伎倆人、夫れゆへ僅か五萬石の大名家でありながら、信州上田の眞田家と云へば、關東八ヶ國は申すに及ばず、日本全國に鳴り響いた由緒ある家柄でございまして、處が父君昌幸公は日夜日本全國の形勢に眼を附け、又は深山の間者を出して居ながら諸國諸大名の動靜を深めて居られる、斯様なお身の上でございまして、文學の心得も又格別、時にはお慰みとして、毎

第六回

ふ、實に面白き活劇談は、次回を讀んで知り給へ……

助 佐 飛 猿

月一回づゝ夜分にお歌合せと云ふ事を爲さる、此のお歌合せの時には、表御殿奥御殿の男女が打ち交つて夫々歌を考へ、昌幸公のお手許へ差し上げる、スルト昌幸公は夫れを一々御覽になつて、秀逸となつたものには、御褒美を下さる、然るに此の幸村殿は始終新御殿の方にお出でになつて、餘り此の會へ出られた事はございませぬ、従つて七勇士の連中は一度も面を出した事がない、三「何うだ、今夜は親殿様がお歌合せのお楽しみだぞ、一つ出席して三十一文字を讀んで褒美を頂く氣はないか、」
 一「存知て居るが、なるらん、けり、我々は一番槍一番乗りの功名は存知て居るが、なるらん、けり、かな、なんて、其様な悠長な事は知ら無い、其の様な事をする暇に、角力の一番でも取るに限る、清左様だ、」
 と、七人の豪傑はランデ見向きもしない、然るに此のお歌合せの會で、毎度秀透に出て御褒美を頂くのが、奥様附きの女中で

……其の……と、顔を赤らめて云ひ悪くそうにして居ると、奈良菊は早合點して、奈「オホ、否ですよ五郎三郎様、人をお頼り遊ばす、妾の様な者に貴公様が……」五「ア、待て待て、お前に何うと云ふのじやない、誠に濟まん事だが茲に手紙が一通認めてある、之れを楓殿に差し上げて……色好いお返事をと申して呉れ……」と、密つと奈良菊に手渡しすると、奈良菊は之れを受け取つて表書を見ると「戀しき楓殿へ、焦るゝ五郎三郎より」と、書いてある。奈「オヤ、妾とした事が、ソイ其の妾にと思ひましたが、夫では貴公様が御主人へお惚れ遊ばしたので……イヤ承知いたしました、屹度お手渡しをさせう……」五「ウム、早速聞き届けて呉れて忝ない、之れは輕少なれど受け取つてくりやれ。奈「コレハ……」と、左様なお心添に預りましては……何うも濟みません……」と、到頭手数料を貰ひ受けて、件 of 艶書を主人の楓へ手渡しすると、殿格い楓は何條開封いた

しませうや。楓「コレ奈良菊、お前は此様な者を受け取つてはなりません、以後は決して頼まれるではありませぬぞへ」と、奈良菊を叱り附けて、手紙は其の儘手文庫の中へ投り込んで仕舞つた、又五六日過ぎて奈良菊が表御殿へ出ると、五郎三郎は待ち受けて、五「コレ、奈良菊待て……」奈「オ、五郎三郎様でございませうか。五「コレヤ、五郎三郎様でございませうか。は胸慾な、此の間頼んだ一件は何うした。奈「ホンニ、彼のお手紙は直に御主人へ差し上げました。五「ア、渡して呉れたか、夫れは御苦勞、御開封になつたか。奈「ハイ、其處迄は未だ存知ません。五「オヤ、夫じやア頼りないではないか、乃公は嬉しい返事を承はる考へじやが、何うだらう。奈「ホ、五郎三郎様不可ませぬよ、初戀と云ふものは一通や二通でお返事が出来るものではございませぬ、氣永く遊ばして最ふ一通お書きなされ。五「ア、却々難かしい者だ」と、忽ち一通の艶書を認

めて 五、何うか、相違なくお手渡しを頼む。奈「ハイ、畏まりました。五、之れは、輕少ではあるが其方の氣に入つたものを求め、呉れ、奈「ア、毎度お心附けを頂いて有り難ふ存じます。と、横を向いてベロリと舌を出す、何んしろ奈良菊は手数をとり込みむ目的だから、又持ち歸つて楓に手渡しする。楓「オヤ、彼れ程云ふのに又かへ、五月蠅い事ねへ」と、文庫の中へ投り込んで仕舞ふ、五六日経つ、奈良菊表御殿へ出る。五「コレ、奈良菊何うじや、二通迄差し上げて返事が無いとは可訝しいでないか。奈「不可ませんよ、最ふ一通……氣永く遊ばせ……」又一通書いて渡す、楓へ手渡しする、文庫の中へ打ち込む、斯様な鹽梅で遣つたとも、二十七日通と云ふ艶書を送つた、然るに或日の事、楓は奈良菊を呼び寄せ、楓「コレ、奈良菊、奈「ハイ、何に御用で……」楓「此の間より、五郎三郎殿のお艶書御苦勞であつたが、假令何の様に頼み遊ばすとも、お周旋は出来ません」と。

何故御辭退を申し上げぬ。奈「ハイ、恐れ入ります。楓「イヤ、此の何故ではない、不義はお家の堅き法度ではないか、其の位の事は和女も存じて居る筈、此の後は決して成りません、サア此の艶書は悉皆五郎三郎様の處へお返しに參つて、以後斯様な御冗談を遊ばすなと、楓が申したと確とお答へを申してた……」と。今更ら詮方もなく、奈「ハイ、畏まりました」と、件を合すのて表御殿へ出て來ましたもの、何うも五郎三郎に顔を合すのが極りが悪い。奈「ア、困つた事じや、御主人へ渡しましたか。御開封がございませんと云ふて、五郎三郎様にお返し申すのも濟まぬ譯、何うしたら宜かろう」と、氣を揉んで居るのも無理はございませぬ、一通に付いて何程かづゝ手数が貰つてあるからでございませぬ、奈良菊は種々と考へながら五郎三郎の居る詰所まで來たつて見ると、五郎三郎は机に向つて何か益檢と考

へて居る様子、之れ幸ひと奈良菊は、密つと障子を開いて、作
 の二十七通の簡書を五郎三郎の脊中へ向けて、ボンと放り込み
 其の儘バタ／＼と逃げて仕舞つた、五郎三郎は屹然として、五
 ヤ、何んじや之れは……オ、大變に文が来たぞ、ハ、ア背姿は
 確かに奈良菊、フムン二十七通此方から出した返事が一ツ／＼
 来たのだな、何うも鄭重な事じや、イヤ忝ない……定めて色好
 い返事であろう、何れ讀んで見やう」と、馬鹿な奴もあるもの
 二十七通堅まつて居る文を取り上げ、押し頂いて机の上へ置き
 五「ハチナ、何れを讀んで見やうか、餘り嬉しくつて身体がゾ
 ク／＼する……左様だ真中の處を引き抜いて遣らう」と、一
 合點をして、グツと中央頭を引き抜き、手に取り上げて表書を
 眺めると「戀しき楓殿、焦るゝ五郎三郎より」とある、五「オヤ
 ツ、之れは乃公が遣つた文じや、ハチナ何うしたんだらう」と
 殘らず調べて見たが、一通も開封してございませぬ、五「フム、

借ては一通も讀まないのだな、最初の中に斷つて呉れれば二十
 七通も文を遣るのではなかつたに……今迄豈夫や／＼と思つて
 心待にして居たに、素氣なく斷るとは何事だ、ヨシ乃公も一老
 職伊勢崎五郎兵衛成政の一子五郎三郎成清だ、此の儘濟す事は
 相成らん、是非共本望を遂げなければ措かない」と、五郎三郎
 の思ひ込んだのが、抑も間違の原因でございませぬ、然るに其
 翌日と成りますと、又も例に依つてお歌合せの會がある、首尾
 能く會も濟んで、跡は無禮講になつて御酒を下さる、一ヶ月一
 度の愉快の日でございませぬから、夜分に入つては男女打ち交つ
 てワイ／＼と騒いで居る、處が幾等物堅いと云つても、得てし
 て斯ふ云ふ時には間違の起り安なもの、御主君や奥様の御前で
 は謹んで居りますが、影へ行くと能く疎忽が出来る、萬一左様
 な事があると、御殿の風紀に關はり、取締り方の失策になりま
 す、楓は當年十八才の水も滴る若盛りではございませぬが、真

助 佐 飛 猿

田家の侍大将海野太郎左衛門守勝の娘、品行の正しい事は此の上ない、夫れゆへ奥向きお女中の取締りが命じてある、其處で楓は疎忽があつては我が身の失策のみならず、物堅い父の顔にも關はると、絹地に遠山を描いた雪洞を左の手に握り、重草履を穿いて、右の手で袷衣の襷を取り上げ、室毎くを極めて廻る、松の間も竹の間も梅の間も検め終り、今しも雪の間を検めんと、殿中名題の三十六間お疊廊下を静々通り掛ると、俄かに横合よりヒラリ飛び出したる一人あり、之なん伊勢崎五郎三郎成清でございませぬ、突然楓の前へ立ち塞がり、五「アイヤ、楓殿お待ちなさい」と、聲掛けられて楓は怪といたしました、其所は謹み深き婦女の事とて左あらぬ体に、楓「オ、誰方かと思ひますれば五郎三郎様ではございませぬか、人も通はぬお廊下で何をして入らつしやる、五「コレサ楓殿、何を上げて居るとは強顔なござる、此の間から二十七通の文を差し上げたに、其の

助 佐 飛 猿

儘お返しなさるとは除りと云へば情ない、拙者も伊勢崎の三男五郎三郎、一旦思ひ込んだ事を跳ね附けられたとあつては、刀の手前武士の一分が相立たん、只一度で宜しい……何うか五郎三郎の思ひを叶へて……と、云ひつゝと雪洞を吹き消したから、四邊は黑白も分らぬ眞の間、楓は信ツと身構へて後へ退り、楓「ヤ、之れは何を爲さいます、妾はお役目で廻つて居るもの……」五「是れさ、宜いではござらぬか楓どの……」と弱腰に袴と抱き附いた、楓は屹驚いたしたが、辨への宜い婦女でございませぬから、大きな聲を發しませぬ、之れがお三さんかお乳母とでも云ふ者であつたら、アレ……キャツと大きな聲で喚き立てますが、楓は聲も密かに、楓「アレ、何を爲さいますお廢し遊ばせ、之れはしたり、失禮な事をなさいませぬ」と、振り放さんと漢搔いて居る、五郎三郎は胸中で「五「ウム、最ふ占めた、大きな聲を出さない處を見ると、萬更ら否ではないのじ

やな、尤も乃公の方は出来て居るのだが、相手さへ出来れば大丈夫だ」と無作法にも其の處へ押し伏せんとする、楓は一生懸命、楓之れは五郎三郎様とも覺へませぬ、餘りと云へば、命、宜いではないか、幸ひ人通りもなし真暗闇、決して恥かし、この時なりと、力強き五郎三郎がウンと押し附けたから、は幾等男勝りとは云へ、五郎三郎に掛つては敵いません、小雀の荒鷲に於けるが如き光景で、今しも廊下の真中へ仰向けに押し倒された、五郎三郎は馬乘に打跨り、アハヤ如何はしき舉動に及ばんとする、實にや落花狼藉とは此處なる事か、サア此場の始末は如何相成りませうや、一寸一服いたします。

第七回

血氣未だ定まらず、之れを誠しむる色にありとかや、眞田安

房守昌幸公の近侍頭、伊勢崎五郎三郎成清は、一心に奥女中楓の色香に迷ひ、今しも色慾の餓鬼となつて、有ろう事か有るまい事か、廊下の真只中へ楓を押し倒し、咄嗟一發一番槍の功名に及ばんとする、之れ此の儘であつたならば、清浄無垢なる楓も、茲に節操を破られ、一生拭ふべからざる汚辱を蒙むるのでございませう、天は無道を惡み給へり、折こそあれ、天から降つたか地から湧いたか、ヌツと其の場へ現はれ出たる此の一人は、之なん新御殿の宿直番、猿飛佐助幸吉なり何んしろ闇でも眼が利くと云ふ代物です、腕つと此の場の様子を見て居りました、佐ハ、ア、上に乗り掛つて居るのは、日頃威張つて居る伊勢崎の三男五郎三郎だな、之れは怪しからん奴だ」とヌツと進み寄つたと思つたら、猿飛を延して五郎三郎の袴の腰に帯をムンヅと掴み、グツと宙へ提げた、五郎三郎は驚いた、既に危機一髪と云ふ處を、思ひ懸なく大力無双の猿飛佐助に引き

殿御振りと云ひ……彼んなお慈悲深い方はない、若殿附きのお
 小姓には、勇ましいお方が澤山あるが、仲にも一際優れた猿飛
 小町か穴無しかと云はれた物堅い楓が、石部金吉金児、小野の
 舞つた、或日の事楓は部屋で何かコンクいたして居りました
 が、楓「コレ奈良菊や、奈「ハイ、何に御用で……」楓「イヤ、茲に
 お文が一通ある、此のお文を内々で新御殿の猿飛様へ差し上げ
 てお呉れ、奈「オヤ、何でございませう、不義はお家の御法度、豈
 矢御存知ない事はございませう」と、飛んだ所で仇討を遣つ
 て居る、楓「イヤ、左様云ふのは道理じやが、實は其の一寸……」
 奈「オホ、彼の猿飛様に御懸慕をなさいましたか、お物堅い御主
 人様でも、彼の猿飛様に御懸慕をなさいましたか、又彼んな殿
 御はございませぬ、お惚れ遊ばしたも御無理はない、妾は驚く
 の昔から……」と、濡らぬ事を口際り立て、件の文を受け取り候

中いたし、遙か隔て居る新御殿へ歩つて参り、猿飛佐助の詰部
 屋へ来て見ると、丁度佐助一人が何か書物を見て居りましたが
 密かに障子の向ふへ忍び寄つた足音を早くも耳にし、佐「誰だ、
 其處へ忍んで来たのは……」と、先を越されて奈良菊は吃驚い
 たし、前後を見廻はして障子の内部へ這入り込み、奈「ハイ、申
 し上げます、佐「オヤッ、婦女が此處へ來るとは怪しからん、何
 の用だ、奈「イヤ、楓の召し使ひ奈良菊でございませう、佐「フム、
 夫れが何んの用で参つた、奈「ハイ、主人楓より貴公様へ……此
 のお文を持参いたしました、何卒御覽下されたふ存じます、佐「
 ナニ、楓殿より文……之れは奇怪千萬、楓殿より文を頂く仔細
 はない、併しなから折角持ち参つたもの、受け取る丈けは受け
 取つて遣はす、奈「有り難ふございませう、佐「サア、早く歸れ……
 何れ拜見いたすと申して呉れ、奈「畏まりました、御免遊ばせ」
 と、奈良菊は歸つて行く、跡に猿飛佐助は件の文を取り上げ、

を爲さらなだではございませぬか、夫れに三通位いで請と仰
 しやる筈がございませぬ、根氣好く降る程お遣り遊ばせ楓成
 程、夫れも左様じや……と、自分が五郎三郎を焦した覺へが
 ありますから、逆も三通位では返事があるまいとは思ひました
 が、根が發明な婦女でありますゆへ、無闇に遣る様な事はしな
 い、其の儘我慢をして差し控へて居る、然るに月日は夢の如く
 打ち過ぎまして、夫より一年ばかり経つて或日の事、猿飛佐助
 は何か捜し物でもあつたと見へ、手文庫を上下へ轉覆して居る
 處へ、三好清海入道と穴山岩千代がヒョククリ歩つて来た、清
 イヨ、猿飛何をして居る、穴無闇にマゼツ返して居るでは
 ないか、佐、オ、マア夫れへ座れ、一寸物を捜して居るのだ、
 清、フン左様か……と、云ひつゝ兩人は控乎と夫れへ座つて
 尻つと見廻して居ると、不圖眼に着いた三通の文、穴「オヤッ、
 可笑な文があるぞ、猿飛奴貴様怪しからん奴だ、佐「ナニ、何が

苦笑ひをいたしながら、佐「ハ、ハ、ハ、此の間助けて遣つて嬌し
 く云へは附け上り、直に附文をするとは、驚いた、女子と小人
 は發ひ難し、未だく、佐助は婦女子の爲めに笑ひを受くる様な
 事はいたさぬ、何を馬鹿な……と、其の儘文を懐裡へ捻じ込
 んで、自分の部屋へ立ち歸り、手文庫の中へ放り込んで仕舞つ
 た、此方の楓は七八日経つても返事がないから、楓「奈良菊や、
 何うしたのであらう、猿飛様から未だお返事がないが……
 オホ、ハ、ハ、……左様にお急ぎ遊ばしても不可けません最ふ一ッ
 お書きなさいませ」と、五郎三郎に云つた通りを云つて居る、
 又文を遣る返事がない、到頭三通遣りましたが、梨の礫で待て
 と暮らせ、何の音沙汰もございませぬ、楓は氣を焦ち、楓「コ
 と、奈良菊、最ふ三通もお文を差し上げたに、何のお返事も
 三郎様よりは二十七日通もお文をお貰ひ遊ばして、少ともお返事
 三郎様よりは二十七日通もお文をお貰ひ遊ばして、少ともお返事

い 穴「ヨシ、讀んでやろう、エヘン 清「オイ、穴山エヘン
 は 抜きにして、早く讀んで聞かせ面白く節を附けて 穴「ハ、
 、 難かしい注文だな、ソレ讀むぞ……初まり……何々、お歌
 合せの其の晩、お長廊下に於いて…… 清此の野郎、場處に事
 缺いでお長廊下とは怪しからん 穴「オイ、中途で邪魔して
 は 讀み悪く、困る、終り迄黙つて聞け、お長廊下に於いて
 惡漢の爲めに辱しめを受けんとする、最も危き場合をお助け下
 され、誠に以つて忝ふ存じます、お禮にも参るべきであります
 れど、何と申すも捉厳しい御殿勤め、取り敢へず拙筆以つて
 此の段御禮を申し上げ候、あら、かしこ」と到つて高尙な文
 面「穴「オヤツ、之れは別に狼がましい事は書いてないぞ、危難
 を救はれた禮の手紙だ、清「左様だ、猿飛貴様は楓を助けて遣つ
 た事があるのか、佐「オ、昨年の暮にお歌合せがあつた晩だ、
 既に危い處を助けた、穴「フム、其様なら左様と云へば喧ましく

云ふのじやアなかつた、其の禮手紙を又今迄開封せんと云ふ奴
 があるか、楓殿は何んなに怒つて居るかも知らん、一体貴様は
 男振りには良いが、餘り野暮過るから困る、文と云つても立派な
 ものだ、人に助けられて禮を云ふのは當前だ、少と氣を利かせ
 忍術を使ふ位のものが、中の文面位い見へそうなものだ」と、
 二人は惨散、佐助を悪く云つて居る、佐助も初めて此の文を見て
 佐「フム、失策つた、不義を勸める文で、惚れたの願れたの云
 つて居ると思つて、今迄見向きもせず打放つて置いたのだが、
 何うも濟まん事をした、猿飛佐助は仁義も知らぬ奴だと輕蔑し
 られるが苦しい、オイ穴山、早く次の手紙を讀んで呉れ、穴「ヨ
 シ、貴様が讀むなと云つても讀むのだ、何か立腹の文句がある
 に相違ない」と穴山岩千代は聲高々と二通目を讀んで見ると、
 イヤ書いたともく、寝ても覺めても忘れられない、貴公の面
 影が、目の先に散ら附いて居ると云ふ絶書でございませうから、

負けに長廊下で仕損ひ、其の上人に娶られては、無駄骨折つて
 鷹の飼食とは此の事だ、何うしやう〜』と自分の部屋に閉ぢ
 籠り、碌々食事もせず、情氣返つて居ります、ヌルト五郎三
 郎の氣に入りの家來、松田源五郎と云ふが出て参り、源五郎、
 若様、五郎、源五郎か何用だ、源ハ、何うやら此の節は確
 々食事も成さらず、部屋にばかり閉籠つて入らつしやいますか
 一体何うなさいましたので、五、オ、如何にも残念だ、源何が
 残念でございます、五イヤ其方等に話した處で仕方がない、源
 オヤ之れは怪しからぬ事を仰しやる、私は尊君様の家來ではご
 ざいませんか、三人寄れば文珠の智慧、膝とも談合と申す事が
 ございませぬ、是非話して御覽なさいませ、五、ウム左様か、然ら
 ば申して聞かそう、實は云々斯様〜である、處が今度楓は猿
 飛佐助と許婚の約束整ひ、二十五歳の曉には結婚をいたすとや
 ら、焦れ慕ふ婦女を人に娶られて、阿容〜指を啣へて居ると

云ふは、何うも意氣地のない話して、如何にも残念千萬、夫れ
 へ毎日耐ぎ込んで居るのだけい』と聞いた松田源五郎は何々
 と打ち笑ひ、源アハ、ハ、ハ、之れは何うも驚いた、若様にもお
 似合いなさらん事を仰しやる、左様な事は何うでも宜しいでは
 ございませんか、五、コリヤ何が宜いのだ、笑ふと云ふがあるか
 源ハ、ハ、ハ、真顔でお怒りなさる處が可笑い、貴公は眞田家
 の御近侍頭、奥向きの勝手は能く御存知で入らつしやいませう
 五、ウム、夫れは存知て居る、源シヤア、造作はございません
 五、何か名案があるか、源有りますとも、闇の夜に我々が五六
 入て貴公のお供をして奥向へ忍び込み、楓を拐帶へて姿を隠せ
 ば大丈夫です、其の上で否應云はさす……何ふでござる、五、ア
 ム、左様な手荒い事をしては餘り惨い、源ハ、ハ、ハ、何アに構
 ふものですか、手足を縛つて本望を遂げなさい、一度婦女たる
 ものが肌身を汚されたら、最ふ仕方がないから貴公を生涯の良

人とは定めぬに極つて居ります、左様しまして一旦手をお付け遊
 ばしたたら、幾等猿飛佐助でも嫁に貰ふ氣遣はございませぬ、
 にお父上は一老職、貴公は御近侍頭、猿飛佐助は何で、新御
 殿の若殿附きで、云は、部屋住みも同様、貴公とは段が違つて
 逆も側へ寄り附ける譯のものじやアございませぬ、後の處は何
 うでも成ります、と悪い事を勧める奴もあるものだ、宛で火の中
 へ油を濃ぎ掛けた様なものだ、五郎三郎は源五郎に煽動てられ
 て、大いに喜び、五夫では源五郎後には心配ないか、源
 松田源五郎が控へて居ります、御心配なさいます、五、イ、
 夫れ聞いて安んじました、然らば遣つ付けやう」と密かに楓を盗み
 出す準備に取り掛かる、此方楓は其様な事は毫も存知ませぬ、
 嫁が整然と極つたので、大いに勢い付き、楓ア、と思ひ焦れた念
 が届いて、少しも厭ひはない、何日迄も待ちます」と、喜悅び勇ん

で居ります、然るに或る夜の事、時刻も彼は玉満頃と思ふ
 頃しも、何者とも知れず、廊下傳ひ、楓の部屋口へ
 忍び来たつた、覆面頭巾の怪し曲者七八名、開の鳥か鳥羽玉
 の真暗闇を幸ひに、楓の臥したる入口の袂へ手を掛けて、ス
 と押し開ける、不圖眼を醒した腰元、奈良翁は、枕頭を見ると怪
 しき曲者が居りますから、奈ア、曲者ッ」と、起き上ら
 んとする奴を、△エ、イ、喧ましい静にしろ」と、情容赦もあ
 らく、高き手籠手に縛り上げ、手拭以て猿轡、側なる柱へ
 確かごと縛り付け、此の物音に目を覺ましたる楓は、瓦破と夜
 具を蹴つて起き上り、床の間にある懐劍の鞘を拂ひ、床柱を後
 楯に寄り、斬らんと身構へて、楓ア、夜陰に乗じて無禮であ
 ろう曲者共、婦女ながら奥向取り締りの楓なるぞ、次第に依
 つては許しは置かぬッ」と、聲振り絞つて呼はつた、スルト片
 脇よりヒラリ飛んで出た五郎三郎成清は、五ナニッ、小癩なッ

レ者共ッ」と、下知に應じて七八名の家來は、合點承知」と各
 自に一刀の鞘を拂ひ、喚き叫んで斬り込んだが、斬つて仕舞つ
 ては何にもならない、無疵で生捕らなければならぬ代物だ、五
 郎三郎は迂路く頻りに心配して「五ア、危ない、此方概
 我をさせるな、手捕にせよ」と、氣を焦つて居る、此方概
 は一生懸命、懐劍逆手に前後左右に當りましたが、相手は多勢
 殊に男と女で仕方がない、心は矢猛に逸れども、漸々二三人に
 手紙を負はしたばかりで、遂に短刀を叩き落され、アツと驚く
 處を押へ付けて、到頭後手に縛り上げられ、豫て用意の猿轡を
 喰まされた五ア、太儀く、ソレ人が掛つては、大變だ、引つ
 擔いで逃げろ、家來「ヘイ、合點」と、四五人が手取り足取り引つ
 擔ぎ、今しも本丸と新御殿の間に建つたる新御門の傍迄來ると
 夜廻りの番兵がカチ／＼と聲を鳴しながら歩つて來る、五ア
 、之れは困つた、夜廻りの番卒だ、若し聲を掛けられた時は

仕方がない切つて捨て、家來「ヘイ、心得ました」と、手筈を示
 し合して、擧際に身を寄せて居る、漸々歩つて來たつた二人
 の夜廻り番卒は、不圖横手を見ると、七八人の怪しき曲者が立
 つて居る、何んしろ真田家の夜廻りだ、曲者を見て腰を抜かす
 様な臆病者は一人もいない、番兵「ヤア、夜陰に及んで新御門の近
 を徘徊いたす怪しの曲者、御用だ」と、一人が棍棒振り
 して打つて掛ると、一人は呼子の笛をピイ／＼と吹き出し
 た、イヤ之れを聞いて詰合の番卒は是れ二十名ばかり、突棒、
 刺股、袖搦、或は六尺棒、鐵棒等、思ひ／＼の得物を提げ、バラ
 取つて仕舞へん」と、勢ひ烈しく打ち込んで來る、五郎三郎も
 今は一生命、太刀の鞘を拂つて真甲に振り冠り、五ア、
 害いたすと撫で切りだぞ、身の程知らぬ番卒奴等……」と、
 勢を相手に切り結ぶ、其の隙を見掛けて家來共は、
 △ソレ、今

だ逃げ出せいと、バラと、に紛れて逃げ去つた。跡に残つた伊勢崎五郎三郎成清は、番卒に取られ、此處を先途と闘つて居りました。が、何んしろ近侍頭を勤むる程の人物だ、番卒の五十や六十には怯ともしない、當るを幸ひ四角八面に涉り合ひ、却々手捕りにする處の騒じやアございませも、番卒共は次第に捲り立てられ、到底敵ひ難くぞ相見へます。此の体見たる氣の利いた番卒は、番「オヤツ、之りや餘程腕前の優れた奴と見へる、取り逃しては我々役目の落度、宿直の御番所へ注進せん」と、一目散に宿直の番所へ馳け附けますと云ふ。愈々伊勢崎五郎三郎成清と、猿飛佐助、幸吉再度の會ひ、猿飛佐助が花も實もある、おもしろき物語りは、次回を讀んで知り給へ……。

第九回

偕ても此の時番卒の一人は、ドンと呼吸急ぎ切つて宿直の番所へ馳け附け、早や御出張下されませ」と、云ひ捨て、又ドンと驅け出した、之れを聞いたる宿直の當番猿飛佐助、幸吉は、ムクムクと起上り、佐「フ、ン、先刻より怪しき物音と思ひしが、偕ては曲者であつたよな、ヨシ此の深夜に新御門の近傍を徘徊するとは奇怪至極、イデ召し捕つて呉れん」と、突然傍にあつたる六尺棒を小脇に挿ひ込み、韋駄天の如くに飛び出した、何んしろ忍術の大名だから、走つて居るのやら飛んで居るのやら判らない、行手に辨があらうが築山があるうが左様な事には頓着ない、ボイと平地を行くが如く駆け附け、が、番卒を相手に追ひつ捲りつ切り合つて居ると、成程一人の曲者が乗り込み來たるや大音聲を張り上げて、佐「ヤア、猿飛佐助は夫れ

今宵の宿直當番は猿飛助幸吉である。曲者其處動くなッ」と
 六尺棒を水車の如く、八相三段に振り廻して飛び込んで来た、
 五郎三郎は之れを聞いて、五南無三失策つた、又猿飛に出會つ
 たか、是れほど厭な奴はない、乃公の色敵は此奴だ、エ、イ何
 條何程の事やらあらん」と、エイヤツと喚き叫んで猿飛へ切り込
 んだ、猿飛は助は暫らくの間右に躲し左に懸し、飛鳥の如く動
 いて居りました、何うして、猿飛に掛つては五郎三郎も
 玩弄品同然、之りや逆も敵はないと思つた、五オヤツ、少々此
 方が剣呑だ、生命あつての物種だ、三十六計逃ぐるに如かず
 と、卑怯にも一刀引つ外して一目散に逃げ出した、佐己れッ、
 逃るとは何事だ、待てッ」と、大鳴一聲猿飛助は、手早く狙
 を定めて手に持つたる六尺棒を、ヤツと一聲投げ附ける、狙ひ
 は過たず五郎三郎の股の間へ飛で行つたと思つたら、五郎三郎
 は林に躓いて、バツタリ夫れへ打つ倒れた、アツと驚き起き上

らんとする處を、躍り掛つた佐助幸吉は、グツと首筋引つ掴み
 佐「ヤ、何うだッ……」と何なく高手籠手に縛り上げる、佐
 ヤア、番卒共御苦勞、控所へ參つて休息に及べ、此の曲
 者は乃公が引つ立て參る番辛「エイ、猿飛様何うぞお頼み申しま
 す、佐「オ、貴様等も大儀であつた」と、其の儘猿飛助は曲
 者五郎三郎を引つ立て、宿直の番所へ連れて来る、五郎三郎は
 胸中に「五ア、情けないなア、先達は燈火を消して暗くして
 呉れたが、今夜も左様して呉れよば宜いが」と、怯々して居る
 と、猿飛助は莞爾と笑つて四邊を見廻はし、佐「アイヤ、五郎
 三郎殿夫れへお座りあれ」と、星を指したる一言に、五郎三郎
 は屹然仰天、五「イヤ、拙者は五郎三郎では……」佐「お黙りなさ
 い、夫れ位な事が判らぬ様で、忍術の名人と云はれませうや、
 五「デモ、某は……」佐「エイ、強て兎や角仰せあれば、遠慮は
 いたさぬ面体を掠める」と、腕を延して差し俯向いて居る五郎

られよ、と情ある其の扱ひに、流石人非人なる五郎三郎も、
ア、有り難き貴殿の計らい、義あり勇ありとは御身の事、御
恩は決して忘れませぬ』と喜悅んで立ち去つた、跡に猿飛佐助
は番卒一同を呼び寄せ、佐「コリヤ皆の者、今宵召し捕つたるは
身分のある方だ、依つて乃公が意見をして助け歸した、假令何
の様な事があつても、口外をいたしては相成らぬぞ、番卒「へい畏
まりました、佐「就ては、今宵の働きの慰勞として、汝等へ少々
づゝ手當を遣はす』と幾らか一同の者へ、口止料を遣はした、
何んしろ當時人氣のある猿飛佐助のする事だから、番卒一同は
大いに喜悅で、番卒「何うも、お年は未だ若い、猿飛様は豪いも
の、花も實もある武士とは斯様な人を云ふのであろう』と皆
々、感心いたして居る、然るに此方五郎三郎は、ヤレ嬉しやと這
々、の体で青くなつて戻つて参りますと、家來の者は待ち兼ねて
家來「オ、若様お歸りなさいませ、私共は何んなに心配したか

三郎の覆面頭巾をグツと取ると、五郎三郎は面目なげに顔赤ら
め、五「イヤ、猿飛殿、面目次第もござらん、何うか御内済に……
佐「ハ、ハ、ハ、之はしたり内済とは何を爲された、五「ハイ、實
は云々、斯様、でござる、佐「成程、夫れは困つた事をいたされ
た、宿世如何なる因縁か、此の間も貴殿にお出合ひ申し、穩便
に相済ましたが、今夜も亦御身を某が手に召し捕るとは情ない
シテ、楓の肌を汚されたか、五「イエ、汚す處ではござらん、家來
共が只今盗み出したるばかりで……、佐「フム、成程、然らば丁度
幸いだ、夜明けにも未だ間のある事、今一度内済でお濟せ申さ
う、此の儘貴殿を役所へ引つ立つれば、彼れは許嫁の楓を奪は
れた、意恨でいたしたと云はるゝも面白くない、早く立ち歸つて
夜の明けない中に、楓を部屋へ密シと返して置かれよ、左すれ
ば御身の顔を見た者は某ばかり、番卒共は口留をいたして都合
好く取り計ひませう』と、縛を手早く解いて、佐「サ、早く歸

助 佐 飛 猿

知れませぬ 五イヤ、乃公は到頭猿飛奴に召し捕られたが、又
助けられて戻つて来た、夫れで楓殿を夜の明けない中に歸して
置かんければならん、御苦勞じやが最一度擔ぎ戻して呉れ」ス
ルト松田源五郎は夫れへ進み出で 源若様、左様な馬鹿くし
い理窟がおりますものか、折角骨を折つて連れて来たものを、
又歸すなんて……冗談ではございませぬせ、生命懸の仕事をし
て置いて 五イヤ、夫れでも仕方がない、猿飛佐助に約束して
来たんだ、氣の毒だが早く頼む 家來「オヤ、と態と恐圖くし
なもので、斯様な満らない事があるものか」と態と恐圖くし
て居る間に、東がホノノと明け掛けた 五ア、失策つた、夜
が明けては歸す譯に行かない、ハテ何うしたら宜かろう」と取
つ措いて思案をいたして居ります、然るに此方は奥御殿、夜
が明けると奈良菊が縛られて居る、楓が盗み出されたと云ふの
で大騒ぎ、早速奈良菊に委細を聞き取り、夫々掛り役人へ届け

助 佐 飛 猿

出る、實に何うも上田城内の奥御殿は、上を下への大騒動で
さいます、真田安房守昌幸公は之れを聞いて安からぬ事に思は
れ、直様老臣勇士を集めて評定に及ばれる 昌ヤヨ者共、予が
城内へ何れより曲者忍び込み、人間を盗み出すとは奇怪千萬
此の儘に捨て置く時は、予が威勢鈍きに似て、隣國への開へも
面目なし、早々詮義に及べいと日頃沈着にして物に動じ給は
ぬ昌幸公も、殊の外なる御立腹でございします、一老職伊勢崎
五郎兵衛、二家老相木源之助、三家老箕十兵衛、侍大將海野太
郎左衛門、其の他穴山小左衛門、海野四郎幸綱等の一門郎黨は
互ひに顔を見合はして、誰も言葉を發する者がございませぬ、
此の時一家老伊勢崎五郎兵衛は一座を見廻して 五アイヤ方々
警固重なる城内へ曲者忍び入るさへ奇怪なるに、奥方お氣に
入りの風を盗み出すとは、容易ならざる所業でござろう、必竟
する奥御殿の勝手を能く存知て居る、當家若武士の爲せし業と

心得る、若しも曲者前非後悔に及んで名乗り出で候に於ては其
 の罪を免し、萬一包み隠して露現に及んだる節は當人は切腹、
 一家一族に到る迄嚴罰に處するといたしては如何でござらう
 と鼻蓋かして述べ立てる、眞逆一家老伊勢崎五郎兵衛も我が子
 五郎三郎がいたした事とは夢にも存じませんから、斯様に云ひ
 出した、一座何れも異議のあろう筈がございません、一同如何に
 も、夫れ宜しかろうと評定の結果を主君に伺ひ上げると、昌
 幸公も御同意遊ばされ、昌然らば、至急其の旨嚴達に及ぶべし
 と仰せ出でに相成つた、然るに禍は下から起る世の譬へ、猿飛
 佐助より何程か口止料を貰つた番卒一同は、之れを聞くと何れ
 も膽を冷し、密かに寄り合をして、△「オイ、大變な事が出来た
 ではないか、猿飛さんより幾らか手當を貰つたもの、此の事
 が露顯すると云ふと、我々も飛んだ迷惑を受けるかも知らん、
 昨夜の始末は云々と云つて、一同が連名で書面を作り、お上へ

訴へて出やうではないか、□「ウム、夫れが宜かろう」と、茲に
 相談一決いたし、委細を認めたる書面を拵へ、番卒一同より届
 け出でに及んだ、其の文面に曰く、昨夜奥御殿に忍び入り、櫻
 殿を奪ひ去らんとせし曲者、新御門の近傍に於いて見付け候、
 然るに其の首領とも思しき者は、容易ならざる強者に之れ有り
 私共にては迎も召し捕る事は、依つて宿直御當番所へ御注
 進に及び候處、折柄猿飛佐助様早速お驅付けに相成り、其の首
 領を召し捕られ候へども、何か身分ある御方とやらにて、猿飛
 佐助様一人の御計らひにて差し免されたる由し、素より私共に
 於いては聊か存知申さず、右此の段上申に及び候、と斯様な文
 言でございます、之れを讀み終つたる伊勢崎五郎兵衛成政は
 五、之れは以ての外、の事である、曲者を召し捕りながら
 獨断にて差し許すとは甚だ以つて其の意を得ず、假令若君附き
 の家來たりとも容赦はならぬ、ヤア、
 者共新御殿に掛け合ひ

猿 飛 佐 助

猿飛佐助に細打つて引つ立てい」と、一家老の威光を振り廻し
て殿命を傳へる、老臣勇士の面々は苦々しい事に思つたが是非
がない、直様此の事を新御殿の幸村殿の方に掛合ひとなる、之
れをお聞き遊ばしたる幸村殿は、別に驚かれたる風体もなく、
幸「成程、本丸よりの掛合至極道理、ヤヨ誰かある猿飛佐助を
呼べい」ハツと答へてお側に控へし寛十藏は、猿飛佐助を呼ん
き来る、スルト幸村殿は「幸「佐助昨夜は宿直當番大儀であつた
新御門の近傍に於いて怪しき曲者楓を奪ひ、奥御殿より逃げ出
せしを召し捕りし趣き、然るに汝私の一存を以つて放ち遣りし
と承はる、夫れに相違ないか」と、尋ねられて佐助は「佐「ア、
失策つた、誰か云つたのさう」と、思ひましたか今更ら隠す
譯に行かす、佐「ハツ、仰せの通り曲者の首領を召し捕りました
が、仔細あつて私一存に差し免したに相違ございませぬ、幸「フ

猿 飛 佐 助

ム左様か、何と思つて許した、不届至極の曲者、召し捕つたる
上は其の筋へ差し出すが至當でないか、實は只今本丸より云々
斯様くと掛合つて来た、誰じや曲者は……佐「イヤ、お言葉
御尤には候へども、一旦免し遣はしたる曲者、假令御主人のお
尋ねなりとも、此の儀ばかりは申し上げる譯に相成りませぬ、
まつた餘人を奪ひ返るなら屹度其の筋へ引き出しもいたします
が、楓と私とは御承知の間柄、其の意恨を以つて此の佐助が曲
者を糺明いたしたとあつては、武士の面目末代迄の名折れと心
得、所謂前後の事情を思ひやり、差し免したる儀にございます
れば、今に到つて其の名前を申し上げるは、武士たる者の爲す
べき事ではなからうと考へます、何うか其の儀ばかりは……幸「
フム、何うあつても云はぬか、佐「ハイ、此の佐助の首が飛んで
も申し上げる譯には参りませぬ」と、決心の色を現はして、斷
然と云ひ放つ、幸村殿は莞爾と打笑み給ひ、幸「ツム、愛い奴ぢ

助 佐 飛 猿

や、其の方には天晴武士だ、必らず名前を申すなよ、之より汝を
本丸の方へ引つ立てる間、如何様の責折鑑に遣ふとも、一度人を
を助けて置いて、其の名前を申す様では眞の武士ではないぞ、
佐ハツ、仰せにや及ぶべき、猿飛佐助は武士でござる、萬事
御安心下さいませ、幸オ、夫でこそ幸村の家來だ、然らば氣
の毒だが細を打つて引つ立てるから左様心得ろ、佐ハツ、苦し
ふございませぬ、其處で幸村殿はお側を見廻し給ひ、幸ヤアヤ
ア、穴山岩千代、寛十藏、望月六郎、海野六郎、三好清海入道
同じく伊三入道、汝等六人は猿飛助佐に細打つて本丸へ引つ立
てよ、ハツと答へて六人は突ッ立ち上つたが、互いに顔見合せ
て、穴オイ、満らないなア兄弟分の猿飛に細を打つのは……三
左様だ、猿飛も宜い加減に云つて仕舞へば宜いものを、餘り堅
いにも程があるよ、と、ブツ、何故細を掛けぬ、予が命令を
勘まして、幸コリヤ六人のもの、

助 佐 飛 猿

背くか、早く引つ立て、左る代りに呉々も云つて置くが、一
家老伊勢崎五郎兵衛は意地の悪い奴だから、萬一猿飛佐助を責
め拷問と申すであらう、其の時には汝等六人が喧ましく云つて
遣れ、尙ほ又岩千代と望月六郎は今夜云々斯様、にいたして
眞の曲者を捜し出すが宜からう、佐助が白状いたさずとも、予
は大抵見當が付いて居る、と、夫々計略をお授けになる、六人
の豪傑は今に始めぬ幸村殿の眼力に敬服いたし、喜悅び勇んで
猿飛佐助に細打ち、清オイ猿飛、暫らく我慢しろ、乃公等が附
いて居つたら大丈夫だ、サア之から本丸の老徳共を驚かして遣
ろ、海左様だ、日頃乃公等を小僧の様に思つて居るのが
猿飛に障る、ソレ乗り込めい、と、六勇士は勇み立つて細付の猿
飛佐助を引き連れ、力味返つて本丸差して歩つて参りますと
云ふ、愈々之からが面白き大眼目に移るのでございませぬが、
暫らく休憩の上次回に……

第十回

猿飛佐助

盗人を捕へて見れば我が子なり、七度探ねて人を疑へ、全体此の伊勢崎五郎兵衛成政と云へるは、其の父伊勢崎五郎兵衛成氏が、眞田彈正忠幸隆公の一家老であつたが爲めに、父成氏が死して後は、其の跡を継いで五郎兵衛成政が家老職となり、眞田安房守昌幸公の世に成つても、相變らず威權を擅にして居るのてございします、然し餘り性質の良くない人物で、昌幸公もお氣には入らぬのでございします、父成氏が軍功ありしを思し召され、矢張り一家老の位置を與へて居られるのでございします、今しも六人の衆は、猿飛佐助を引つ立て、御本丸の大廣間へ歩つて來ると、意地悪の伊勢崎五郎兵衛は、猿飛佐助に赤恥を掻かして遣らうと思ひながら、猿飛佐助頭を上げいと、葉そうて居りましたが、五如何に、猿飛佐助頭を上げいと、葉そう

猿飛佐助

に云つて居る、佐助は胸中に、佐、何、知らず、乃公を調べるとは何事だ、馬鹿な奴もあるものだ、と、嘲笑ひつゝ、謙にで頭を掻けると、正面には眞田安房守昌幸公、然としてお控に、なり、右手にムンツと構へたるは、これぞ一家老伊勢崎五郎兵衛成政、夫れに續いて二番家老相木源三郎……此の人は彼の有名なる相木森之助の嫡子でございします、其の次に三家老、兵衛、之れは幸村殿の荒小姓、寛十造の父親でございまして、以前は武田家の家老、原大隅守の足輕であつたのを、彈正忠幸隆公が見込まれて、我が家來とせられたのでございします、左手には侍大將海野太郎左衛門、此の方方は海野六郎の叔父に當る人で、楓の親でございします、其の他穴山小左衛門、此の方も以前は武田家の直臣であつたが、彈正忠幸隆公が特に見込んで、自分の家の豪傑でございします、斯かる一騎當千の勇士が、綺羅星の如く

助 佐 飛 猿

に居列んで居る、實にや我が國の軍師と呼ばれし、眞田安房守
昌幸公の御前、虫なき原野を行くが如く森閑といたして居る、
此の時一家老伊勢崎五郎兵衛成政は威丈高に相成つて五
猿飛佐助、昨夜與御殿に忍び入り、女中取締り楓を奪ひ逃げ去
つたる曲者あり、其の首領とも思しき奴を、汝は新御門の傍に
て召し捕りながら、私の一存にて控に差し許したる義不届至極
全体其の曲者は何者であるか存知居らう、速かに白状に及べ、
佐ハッ、恐れ入りました、某し義に依つて其の者を助け遣は
しました、が、姓名を申し上げた、事、出来ません、五、然ら
ば名前を知らぬと申し上げた、此處は何處と思ふぞ、當國の領主
眞田安房守昌幸公の御前なるぞ、速かに白状いたせ、佐イヤ、
決して申しませぬ、萬一曲者の姓名を申し上げると、其處等邊
りに少々赤面なさるお方がございますれば、云はぬが花かど心

助 佐 飛 猿

得ます、五、ナント、愈々申す事出来ぬか、佐ハ、ハ、ハ、幾等仰
せあつても同じ事、猿飛佐助は武士でござる、五、オ、ハ、然らば
拷問に及ぶぞ、佐イヤ、拷問が怖くつて白状をする様な佐助に
あらず、サア存分に「され」と、少しも恐れぬ丈夫の魂、
伊勢崎五郎兵衛は之れを見るより烈火の如く憤り、五、ヤ、ア、小
猿千鶴な事を申す奴だ、ソレ者共猿飛佐助、拷問の準備に及べ
い」と、呼はる聲に、ハッと答へて近侍の面々、既に其の場を
立ち上らんとする折柄、遙か末座に控へたる六人の荒小姓は、
ヅカ、と一齋に夫れへ進み出で、中に横紙破りの三好清海入
道は、怒りの大音張り上げて、清「アイヤ御家老暫らく、猿飛佐
助は若殿御寵愛の家来でござる……然るに斯ばかりの事を仰々
我が身を捨て、何事でも白状いたさる處、却々天晴なる心掛け、賞
めこそすれ、答むべき點は少しもござらぬ、拷問丈けは相成りま

せぬ 五 ナング、此の場處は汝等の嘴を出すべき處でない、控へ居る、呆痴者奴がッ……」と、柄權押しに怒鳴り付けると、スルト今度は弟の伊三入道が「イヤッ、御家老呆痴者とは無禮でござろう、腰板武士なら知らぬ事、眞の勇士は義を守つて一命を捨つる例は幾等もある、我々六人の者が罷りあるから是指一本も飛佐助に觸れさせず事相成らん、強て拷問がしたいとあらば、腕突くでして見させやい、御主人より預つたる大切なる此の猿飛、拷問なぞとは不都合極まる、次第に依つては一家老と云はさぬが何うじや」と、宛で喧嘩腰で詰め寄せる、流石の伊勢崎五郎兵衛も、無茶苦茶者の六人に規はれては堪らなはい、海氣味が悪くなつたと見へて、モジクして居る、昌幸公は聲掛け給ひ昌ヤア、六人の者控へる、穩ならざる其の振舞一件、猿飛佐助にも落度あり、依つて二日の猶豫を興へるに付

き、眞の曲者を捜し出して差し出すが宜からう、夫れ迄は猿飛佐助を相木源之助の屋敷へ預ける、左様心得よ」と、鶴の一聲に、六人の者はハツと叩頭平身に及ぶ、一家老伊勢崎五郎兵衛は漸々胸撫で下し蘇生の思をいたして居る、其處で其の日の評定は一先づ相濟み、佐助は相木源之助の屋敷へ連れ行かれ、一同は思ひく、に御殿を退出する、六人の勇士は新御殿へ立ち歸り、委細の趣を御主人幸村殿に申し上げる、幸村は之れを聞いて莞爾と打ち笑ひ「幸ハ、お父上も矢張り予と同じ御意に見だ、是非其今夜の付いて穴山岩千代海野六郎、先刻申し付けたる通り是れ、兩人は其の儘お目通りを下り、何れへか立ち出でます、然るに其の日も何なく暮れて、點燈頭と相成ると、伊勢崎五郎三郎屋敷門前へ、ムツと現はれ出たる覆面巾の二人の曲者あり、互ひに囁き合ひながら、何うだ穴山、最ふ誰か出

て來そうなものだが……穴左様だ、海野貴様は其の板鼻に引
つ附いて居れ、乃公は此方に居る。海野、合點だ」と、左右
に分れて間に隠れました。云はすと知れた、主人幸村の仰
せを受けて、五郎三郎の屋敷の様子を窺はんと、之れ迄忍び來
たつた、穴山岩千代、海野六郎の兩人でございませう、暫
らくすると、通用門をギイと押開き、踏々跟々と立ち出でたる
一人あり、△エイ、ア、酔つた、宜い心持だ、若様を煩
動て上げて楓を盗ませはしたもので、餘り事柄が大仰になつて
迂闊く、するど露現そうだ、何うかして今夜の中に他へ隠した
いものだが……と、天に口なし人を以つて云はしむ、誰れも
居らんと思つて一人言を云つて居る奴を、間に隠れて先刻より
何か手掛りはないかと窺つて居たる穴山海野の兩人は、之れを
聞くと等しくバラバラと其の場へ躍り出で、穴山岩千代は突然
猿臂を延して襟首グツと引つ掴み、穴山海野聞いたか、手掛りは

出來たぞ、海野、聞いたく、ヤイ、貴様は何者だ、面を檢め
て遣らう」と、鬚をグイと引き上げた、二人は尻ツと面を覗き
込んで、穴山、貴様は伊勢崎五郎三郎の腰巾着、松田源五郎
だ、なッ、海ナニ、松田かッ、汝ッ……と、堪へ情のない海野
六郎は、拳骨固めて源五郎の横面を一ツポカーンと擲り付けた
と、源痛いッ、お助け……穴エ、イ、痛いも絲瓜もあるかい
と、源頭兩豪傑は源五郎を縛り上げて仕舞つた、源五郎は酒の
酔ひも醒め果て、背くなつてガタ／＼震い出し、源コ、コレ
ハ、穴山様に海野様、餘り亂暴を爲さるにも程がありませう、一
体之りや何うしたのでございませうと、聞いた兩人は何々と打
ち笑ひ、海アハ、ハ、ハ、ヤイ空惚けるな、源五郎、汝は乃公の従
妹の楓殿を隠して居るだらう、源メ、滅相な、左様な事を……
穴、黙れ、貴様は今酔つた紛れに獨り口喋つて居つたではない
か、我々兩人が掛つたら遁す事ではないぞ、シタバタ騒ぐな此

御身を助けに來たッ、早く〜と、猿轡を取り除け縛を解いて、
 て道ると、楓は夢に見る心地して、六郎様かッ……
 穴山様迄……誠に有り難ふ存じます、六イヤ、禮なぞは後の事
 サア歸ろう」と、既に其の場を立ち去らんとする處へ、向ふよ
 り三四人の人聲が聞へますから、三人は黒板扉に身を躲し、密
 かに様子を探つて居ると、彼等四人連れは、四邊構はす高聲で
 △「オイ望月に、御主人も氣が利かんとやないか、海野と穴
 山丈けに仕事を云ひ付けて、我々四人を放つて置かれるとは、餘
 りじや、望左様だ、少々癩に障るから、勝手に此處へ出て來た
 のだが、何でも伊勢崎五郎三郎が怪しいと乃公は腕んで居るの
 だ、一つ乗り込んで五郎三郎を詮議に及んで遣らうか、
 、三好と望月の云ふ通り、怪しくなくつても構はない、
 五郎三郎と三好と望月の云ふ通り、怪しくなくつても構はない、
 通、三好と望月の云ふ通り、怪しくなくつても構はない、
 た通、三好と望月の云ふ通り、怪しくなくつても構はない、

の野郎ッ」と、兩人が力に任せてホカン〜と叩き付ける、源
 五郎はヒイ〜と云つて居る奴を、手早く猿轡を噛まして片脇へ
 放り飛ばし、尙ほ様子を探つて居ると、今度は本門をギイッ
 と八文字に押し開いて、ソロ〜と、今度は一挺の籠乗物、
 五六人の家來が四方を取り圍み、△ソレ、早く行けい、
 と、合點と、スタ〜二三間行つたと思ふ頃しも、左右より
 躍り出たる穴山岩千代と海野六郎、穴山は乗物の棒鼻グツと突
 き戻し、穴山、此の乗物の中の主が入用だ、ソレ海野遣つ付
 けろ、海、心得たり〜と、云ふが早い、ヤッ〜一聲前
 に立つた、兩人を引つ掴んで、頭顱と投げ出した、△ヤア、
 猿轡者だッ油断をするなッ〜と、乗物を其の場へ打ち捨て、兩
 人に對つて叩き掛つて來る、海、乗物を其の場へ打ち捨て、兩
 兩家來は瞬く間に六人の家來を打つ倒し、乗物と戸を蹴外し、
 海、海野六郎だッ、穴山を一處に若君の仰せを蒙むり、

らす奴の所爲に相違ないと思ふが何うだ 伊左様ともく、萬
 一事が間違つても、我々四人が罪を引き受ければ差支へない
 ノオ兄貴、清オ、貴様の云ふ通り、申し譯が出来なかつたら
 腹を切つて死ぬる迄の事だ、サア乗り込めい」と、無茶苦茶者
 の四人は、ドス、門前へ歩つて來ると、ドンと突き當つたも
 のがある、清ヤイ、誰だ突き當つたのは……オヤッ乗物らしい
 が、倒れて居る……ハ、ア穴山と海野が早や仕事を遣つたな、
 エ、イ、忌々しいなア、事に依ると楓殿を奪ひ取つて歸つたの
 かも知れないぞ、伊左様だ、然し我々の目的は五郎三郎だから
 構ふ事はない、何うやら門も開け放してある様子、丁度幸だ入
 り込めい」と、咄嗟門内へ亂入なさんとする折柄、門内よりド
 カ、と現はれ出た十五七人の人数あり、先に立つたのは之
 なん伊勢崎五郎三郎成清とこそ相見えたり、左りの手に弓張提

燈を提げ、右の手は太刀を抜き放ち、五、コッヤ、六、藏何處だ、
 曲者が出たと云ふは……六、ヘ、且、那樣其處でございます
 と、乗物の側へ進み寄り、三好清海入道は突然五郎三郎に飛び掛
 り、清ヤア、神妙にしる五郎三郎、汝には用があるのだ此方へ
 來せい」と利腕グイと引つ掴み、エイと一聲肩に擔いで岩石落
 し、頭顱倒れ投げ附けたり、アツと驚き起さ上らんとする處を
 乗り込んだる笥十造は、十、エイッ藻掻くな、汝の様は奴は武士
 の風上にも置けない代物だ、笥十造を知らなにか」と頭打ん
 縛つて仕舞つた、家來の面々は此の体を見るより大いに驚き家來
 ソレ曲者あり出會へ」と大聲に呼はりながら、四人を望ん
 で打ち掛る、四人は得物も持たず、望オ、一人は面倒だ
 一束になつて來やアがれ」と、四ヶ處に分れて働いて居る、那
 際に隠れたる穴山岩千代、海野六郎、楓の三人は、穴オホ、四

助 佐 飛 猿

奴兩人を逃がしては不可ないぞ、明朝迄張り番をして居れい、
 番卒「へい、心得ました、オヤツ、伊勢崎五郎三郎様に松田さんじ
 やアございませんか、望左様だ、少し思惑があつて縛つて来た
 のだ」と、番卒の驚くを尻眼に掛けて四人は部屋に歸つて其の
 夜は寝み、偕て夜が明けると、幸村殿のお目通りへ出て、云々
 斯様く、と物語る、幸村殿は兼て穴山、海部より委細を聞いて
 居りますゆへ、別に驚きの風体もなく、幸アハ、ハ、ハ、大儀を予
 其の方等の事は穴山海野より聞き及んだ、苦しふない兩人を予
 が目通りへ引いと、流石の五郎三郎も源五郎の白状と云ひ、既に肝
 に及びますと、石の五郎三郎も源五郎の一言半句の申し譯もな
 心の楓を奪ひ返されて居ります事ゆへ、一人の命じて、云々と
 く恐れ入つた、其處で幸村は又も六人の勇士に命じて、云々と
 計略を授け本丸へ引つ立てさせる、六人は二人の奴を縛めたる
 儘本丸へ連れ来り、密かに一室へ閉ぢ込め置き、中にも辯舌に巧

助 佐 飛 猿

なる望月六郎は、老臣勇士の居並ぶ大廣間へ出て参り、望ハッ
 御家老へ申し上げます、五何んじや、望「はい、只今前夜の曲者
 を首尾能く召し捕り、次の室迄連れ参りました、何卒格別の御
 憐愍を以つて、寛大の御所置を願ひたい、本人は勿論親類縁者
 に到る迄、お咎めなき様偏へに御願ひ申す、五「黙らつしやい、
 名乗り出でたる者は許すと觸れ出したれど、召し捕られたる者
 は當人は切腹、親類縁者に到る迄罰すると云ふ定めでござる、
 望「如何にも、御意には候へども、夫では餘り氣の毒でござる、
 にも少々其の……五「エ、イ、諄い……望「イヤ、斯程お願ひ
 申してもお聞き入れなくば是非に及ばん、然らば曲者を此の處
 へ呼び出すでござらう、五「勿論、早くさつしやい、不埒至極な
 曲者じや、ウム……」と、意地悪の五郎兵衛、真逆我が子とは
 思ひませんから、ウン、と唸つて居る、此の時望月六郎は可
 笑さ堪へて態と大音聲、望「ヤア、お次に控へし五人の者

召し捕つたる二人の曲者を早や〜之れへ引つ立てい」と、呼はる聲と諸共に、次の襖を押し開き、細付の儘に引つ立て来たつたる二人の曲者、五郎兵衛成政は何奴なるかと眼を据へて信つと睨み附けて居ると、五人の勇士は之れ見ると云はぬばかりに其の場へ兩人を引き据へ、消ハ、ツ、我が君様を始め一座の御方々、我々が召し捕りし豆盗人は此奴でござる、ヤイ二人の者能く面を上げて御家老に面体を検べて貰へい、御家老此奴でござる、何と圖迂〜しい曲者ではございませんか」と、態と兩人の唇を掴んでグツと面を上へ向けると、チラリ其の顔眺めた五郎兵衛成政は、五ヤ、其方は五郎三郎、源五郎……と腰を振さんばかりに打ち驚き、何とも蚊とも譬へ様のない可笑な顔をして、面目なげに差し俯向いて仕舞つた、スルト侍大將海野太郎左衛門は夫れへ蹴り出で、太アイヤ御家老、拙者の娘を奪ひ取つた曲者は此奴と極つたる上は、何うか當人は切腹、

親類縁者は夫々殿罰に行ふて戴きたい、今迄は娘の事ゆへ黙つて差し控へ居りましたが、斯く曲者現はれたからには、一刻も猶豫すべき場合ではござるまい、御返答如何でござる」と、短兵急に詰め掛けられ、流石奸佞邪智なる伊勢崎五郎兵衛成政も一言半句もなく只長大息を吐いて俯向いて居るばかり、實に穴あらば這入りたいたい心地で、ダラ〜冷汗を流し、泣き出しそうな顔付をいたして居る、一座は互ひに目と目を見合せて嘲けり笑つて居る、先刻より此の体御覽に相成つたる安房守昌幸公は昌ヤ、五郎兵衛、藪をツ、イテ蛇を出すと此の事だ、以來は能く氣を付けるが宜かろう、予に於いて思ふ仔細もあれば、汝等が取り調ふるに及ばぬ、先づ夫れ迄は兩人の者も屋敷に引き取り謹慎いたせッ」と、誠に寛大なるお言葉、五郎兵衛はホッと呼吸を吐き、其の場に居堪まらず、病氣と云ひ立て御前を下り、這々の体で退出する、跡に昌幸公は懇々と兩人を意見に

及ばれ昌此の度は、格別の情けを以つて許し遣はす、以後心を改めて忠孝の道を忘れるな」と、御教訓の上お歸しとなる、居列ぶ連中は意外の事に思ひ△何うも、寛大過ぎる御所置だ斯かる大罪人を只御意見のみでお許しになるとは怪しからん」と、何れも顔を見合はして居る、六人の勇士は不平顔に、盛際りも荒々しく、一様に前へ進み出で、穴ハッ、親殿様に申し上ります昌「何んじや、穴我々六人が、艱難をして召し捕つた曲者を、一應のお咎もなくお免しになるとは其の意を得ませぬ、何うか殿前に處して頂きたふ存じます」と、就圍荒く詰め寄せると、昌「幸公は莞爾と打ち笑ひ給ひ昌「ヤヨ者共、汝等の不審は尤なれども、夫れは一を知つて二を知らぬと申すもの、予の考は一子幸村能く存知居る、歸つて幸村に尋ねるが宜かるう」と、仰せられたばかりで、少しも他の事を仰つしやらん、六人はブン、怒りながら新御殿へ戻つて参り、清「オイ、餘り馬鹿

くしいではないか、寛「左様だ、無駄骨折つて何の役に立たない譯だ、御主人にお話し申し、次第に依つては我々六人後とも云はず、其の場で腹割つ捌いて同じ枕に死んで遣らうじやないか一同「オ、宜かるう」と、死ぬる事を屁とも思つて居ない連中はかりだから、忽ち覺悟を定めて幸村殿の御前へ罷り出で、海ハッ、御主人私共は残念で堪りません、幸ハ、ア何が残念だ、一体六人共「ア、怒つて居る様だが何うかしたのか、清「ハイ、實は親殿様が云々斯様、でございませぬ、歸つて幸村に尋ねて見ろ、汝等は一を知つて二を知らぬ者じやと仰せになりませぬ、幸「ア、左様か、夫れはお父上が仰しやつた通りだ、汝等は一を知つて二を知らんものだ、六人「ヘエ……、ソハ又何故でございませぬ、幸「アハ、父上のお思召しは又格別である、若しも伊勢崎五郎三郎と松田源五郎を相當の罰に行ふ時は、之れを召し捕りながら重役にも相談なく、一存で差し

助 佐 飛 猿

宥した猿飛助も相當の所刑に行はなければならぬ、其處で父
 上は五郎三郎を宥して仕舞へば、別段猿飛助にも罪を行はず
 して濟むと云ふお思召した、其處を悟らぬ其の方等は、所謂一
 を知つて二を知らぬと申すものだ』と、聞いた六人はハツと平
 伏なし、六人ハ、ツ、何うも我々恐にして斯かるお思召しとも存
 せず、密かにお恨み申した罪輕からず、何卒御許下されまし
 と、今更らながら幸村殿の思慮分別あるに感心して居ります
 此の時幸村殿は穴山岩千代に向はれ、幸「ヤヨ岩千代、早く相木
 源之助の屋敷へ罷り越し、猿飛佐助を召し連れ歸れよ、彼れに
 申し付くる一義あり」と、岩千代に命じ、直ちに猿飛助をお
 呼び戻しとなる、佐助は岩千代と共に相木の屋敷を立ち出で、
 急ぎ新御殿へ戻つて來ると、折柄安房守昌幸公もお越しとなり
 昌「ヤヨ幸村、汝は伊勢崎五郎兵衛の身の上について、只今至急猿
 飛助を呼び戻したる、幸「ハイ、お父上のお考へは失禮ながら如何でござ
 います、昌「ハ、ハ、ハ、ハ、予の考より貴様の意見を聞こう、幸「イヤ
 然らば斯ふいたしませう、お父上と私と互ひに掌へ書きまして
 一緒に開いては如何で……昌「ツム、面白……然らば硯を持
 てい」と、其處で御親子兩人が何か掌へ書き附けられ、堅く握
 つて、昌「サア、幸村出せ、幸「ハイ、斯様でございませう」と、
 同時に掌を開いて見られると、昌「幸公の掌には『五郎兵衛今夜
 當地を退散』と認められてある、幸村殿の分には『伊勢崎の一族郎
 黨、今夜の中に逐電』と、同じ意味の文句が書いてある、昌「幸
 公は御手を確と叩かれ、昌「ツム、出來した幸村、流石は眞田家
 の血筋だ、シテ其の方の意見は……幸「ハイ、彼等親子は詰り
 眞田家にあつて益なき人物、何れへ便らうとも敢て恐ふには足
 ませんが三代相應の眞田家を捨て他國へ奔る獅子心中の虫、不

助 佐 飛 猿

飛助を呼び戻したる處でございませう、昌「フム、シテ其の考
 は何うじや、幸「ハイ、お父上のお考へは失禮ながら如何でござ
 います、昌「ハ、ハ、ハ、ハ、予の考より貴様の意見を聞こう、幸「イヤ
 然らば斯ふいたしませう、お父上と私と互ひに掌へ書きまして
 一緒に開いては如何で……昌「ツム、面白……然らば硯を持
 てい」と、其處で御親子兩人が何か掌へ書き附けられ、堅く握
 つて、昌「サア、幸村出せ、幸「ハイ、斯様でございませう」と、
 同時に掌を開いて見られると、昌「幸公の掌には『五郎兵衛今夜
 當地を退散』と認められてある、幸村殿の分には『伊勢崎の一族郎
 黨、今夜の中に逐電』と、同じ意味の文句が書いてある、昌「幸
 公は御手を確と叩かれ、昌「ツム、出來した幸村、流石は眞田家
 の血筋だ、シテ其の方の意見は……幸「ハイ、彼等親子は詰り
 眞田家にあつて益なき人物、何れへ便らうとも敢て恐ふには足
 ませんが三代相應の眞田家を捨て他國へ奔る獅子心中の虫、不

助 佐 飛 猿

忠者の見せしめに打果して終ふ方が後の爲に宜しかろうかと心得ます昌ツム、予も同意見だ、ヤヨ佐助之れへ参れ、實は云々斯様くである、後等親子が今夜一族郎黨を纏めて、密かに他國へ走るに相違ない、汝其の後を尾けて落付き先を見定め、假令隣國大名の城内でも苦しからず、忍び込んで親子の首を提げ歸れ、此役目は其方ではなくば勤り難し、確かと申し付けたぞ未だ之と云ふ手柄もございませぬ此佐助、屹度兩人の首を提げて立歸ります、殊に今回の事の原因は皆私より始まつた事他迄も彼等を討取ねば、武士の面目に關はります」と、快よい引き受けた、スルト先刻より之れを聞いて居つた六人の連中は、何條黙つて退引んで居るべきや、第一番に亂暴者の三好清海入道が夫れへ翻り出で、清ハツ、申上げます昌何んじや、清ハツ、斯かる重大なる事件を猿飛一人にお命じになるとは、何も其

助 佐 飛 猿

の意を得ませぬ、他の者は兎も角、此の清海入道には同道を仰せ附けられたふ存じます昌アハ、又清海入道が兎や角申すか、イヤ其の儀は罷り成らぬ、佐助一人で澤山だ、彼には其の方等に真似の出来ぬ妙術がある、其の妙術を以つて乗り込む時には、暇令相手が何萬騎居ろうとも差し支へない、其の願ひは叶はぬぞ」と、御採用がない、其の次には穴山岩千代、望月六郎、寛十造、海野六郎、三好伊三入道と、交るゝ願つたが少しもお聞き入れがない、六人は面影らして差し控へて居ると、幸村は六人に打ち向ひ、幸ヤヨ六人の者、其の方等の相を見事に、密かに抜け駆けの功名を遺る考らしいが何うじや、萬一左様の事をいたしては雄々しき大事、汝等の働くべき時は此處二十日を出でずして來たるは必定、此の度の處は思ひ諦め何にも、穴ハエ……、御主人夫れが今から分つて居りますか、幸如

ます 幸、猿飛佐助の働きに依つて、合戦が起るのだ」と
 聞いた六人は雀躍して打ち喜び、清「イヤ忝ない、オイ猿飛、
 成べく大きな戦争が始まる様に頼むよ、伊「左様だ、其の時
 には一番槍一番乗りの功名は、此の伊三入道が遣つて見せる、
 猿飛「屹度だよ」と、何んしろ血氣盛んの若者ばかり、俄かに拳
 を握つて力味出した、昌幸公と幸村殿は互ひに打ち笑はれ、昌
 アハ、、、勇まし、今に汝等の腕前を現はす時は来る
 わい」と、昌幸公は吳々も猿飛佐助に萬事をお含めになり、本
 丸「差してお歸りとなる、跡に幸村殿は尙も佐助を手許に招かれ
 賀「修理之介、源心入道の手許へ来るは必らず隣國海野口の城主、平
 修「理之介は、予が家の日は、伊勢崎親子の者は必らず隣國海野口の城主、平
 十「人に敵する稀代の傑なれば、伊勢崎親子の討たれたるを憤
 り、此の上田城を攻めに來るは必定、其の時に當つて彼れを打

第十一回

ち滅ぼす父上の御所存、名正しからずんば戦ひ勝ち難しとは兵
 法の云ふ處、不忠者の伊勢崎親子を庇護つたる罪を鳴らし戦を
 交へるに於いては何の不都合か之れあらん、依つて汝も其の心
 得て以つて、油断なく仕遂げて呉れよ」と、胸中を打ち明けて
 述べられる、猿飛佐助は仰せ畏み、佐「ハイ、夥多家臣ある其の
 中より、特に若年なる私をお撰びに相成る段、面目身に餘つて
 喜悦び之れに過ぎません、習ひ覺へし忍術の威徳を以つて、首
 尾能く仕遂げて御覽に入れますれば、何卒御安心下されたしと
 有り難く御禮を申して、自分部屋に引き下り、夫々身仕度に
 及んで、日の暮れるを相待つて居りますと云ふ、サア之より
 猿飛佐助の大働き、海野口城内大騒動のお物語りは、一寸呼吸
 を入れまして、次回に口演じます……。

借ても一家老勢崎五郎兵衛成政は、殿中にて大變面目を失ひ
 其場席にも居堪はず、俄に病氣と云立て、自分の屋敷へ立歸りま
 したが、直様家來に命じて五郎三郎を呼寄せ、父「コレ、五郎三
 郎、五「ハイ、父「ハイではない、困でないか何も……、女中取締
 りの楓を奪ひ出すなぞと……、五「はい、お父上誠に濟みません
 が、私は何うかして楓を我が者にしたいと心得、種々様々に手
 を變へ品を換へ、骨を折つて見ました、然るに人もあろうに猿
 飛の處へ行くと云ふ事が極つたと聞き、如何にも残念で堪りま
 せん、依つて松田源五郎の勸めに依り盗み出して、大きに失策を
 仕りました、父「夫れが困る、左様思つて居る事なら、何故此の
 父に相談せぬ、何れも今直に嫁入りをするとか云ふではない、未だ
 三年も五年も後の事だ、其の中には何とか旨い方法もあつたら
 うに、餘り突然な事をやるから不可ない、剃へ縛り上げられる
 と云ふは何事ぢや、五「へ、夫れでもあの六人の勇士のやつは

却々強ふございまして、逆も私共の敵ふ譯のものではございま
 せん、父「フム、夫れは道理だが乃公は今日御殿に於いて、何う
 して宜かろうかと、立場を失ふたわい、五「はい、何とも早や面
 目次第もございませぬ、父「イヤ、今更ら詫びた處が是非もない
 が、餘り見苦しいから明日より殿中へ出るのが面目ない、荷に
 も一家老勢崎五郎兵衛の一人五郎三郎が斯る事を仕出來して
 は、一般に對して顔を合はす事が出來ない、何とか方法を廻ら
 さんければ相成らん」と、親子は思案途方に暮れて居る處へ、
 次の襖を押し開いて、ヅツと這入り込んで参りましたは、之
 なん五郎兵衛の氣に入りの家來、其の實隣國海野口の城主、平
 賀修理之介の間者として、真田家の様子を捜らん爲め、五郎兵
 衛の家來と相成つて居ります、其川紋左衛門でございします
 芥「ハッ、失禮を仕ります、父「オ、芥川紋左衛門でございします
 芥「はい、只今襖越に承はれば、大層御親子がお鬱きの御様子

助 佐 飛 猿

に見受りますが、何も左様に御心配なさる事はございませぬ。父「ナニ、意味此の上田ばかりに日が照るのではございませぬ。父「ナニ、意味此の機会を以つて當國を退散遊ばされ、隣國海野口の城主平賀修理之介源心入道様へお仕へなさつては如何でございませぬ、此の度重く用ひて呉れませう。父「ハ、ア、汝は平素源心入道様を大辱賞めて居る様だが、因縁のものでも平賀家にあるのか。芥「イ、御座います。若しも御主人が眞田家を背いて平賀家へお仕へになると云ふ事なら、必らず私が御周旋申し上げませう。何んしろ此度の失策で失禮ながら、貴公が御親子は眞田家に居られては價値がございませぬ。夫より平賀家を便つて仕官を爲さる方が御得策かと心得ます。と辯に委せて説き附ける。と、何が借て親子は途方に暮れて居る矢先で承はつた、ジャ

助 佐 飛 猿

ア其方の盡力に依つて何分頼む」と、轉り乗せられて仕舞つた。芥川紋左衛門は仕濟したりと胸中密かに打ち喜び、芥川紋左衛門は御主人、斯ふ事が極つた上は一刻も猶豫なれません、何ん處で眞田安房守様及び若君幸村様は、天眼通と云つて、千里を見抜く恐ろしい眼力を以つて居ります、愚圖くして居つて露現いたしては一大事、今夜の中に一族郎黨を引き纏め、當國を退散いたさねばなりません、早やん御用意あつて然るべし」と、と、忠義顔に述べ立れば、實に道理と親子の者は、俄かに一簇郎黨を呼び寄せ、密かに此の旨を申し含め、夫々準備をいたして居る。芥川一族郎黨總勢七十有餘人は、密かに上田の城下を立ち退き、芥川紋左衛門を案内者として、海野口を差し身仕度に行きます。然るに此方猿飛佐助は日が暮れると、急ぎ

たつて見ると、成程表は静まり返つて居るが、内部は何うやら
 混雑の様子は、何れかで見強つて居よう」と、四邊に
 逃げ出す積りだ、何れかで見強つて居よう」と、四邊に
 を見廻す、之れ幸いだ、枝の上で一休み……と、ツカ
 る、屏際に近寄つたと思つたら、スル／＼と、猿の梢を傳ふ
 よりも尙ほ身輕に生ひ繁つたる枝の真中處へ攀ぢ登り、腰打ち
 掛けて脊延びを爲し、佐ハ、鳥居時以來久しく樹へ登ら
 なかつたが、宜い氣持だ、夫れは左様と姉上は御養子を迎へら
 れたと云ふ手紙だが、何うか仲好く暮して下されは宜いがと
 氣樂な男もあつたもの、色んな事を考へながら、内部と表を七
 分三分に見廻して氣を配つて居る、何んしろ間にでも眼が利く
 と云ふ代物です、屋敷の内は隅から隅迄アリア／＼と能く
 見へる、頻りに道具萬端を片付けて居る、馬

鹿な奴もあるものだ、千里を見通すと云ふ我が君の眼力で睨ま
 れて居るとは知らず、不心得千萬の事をすゝぬと、暫らく
 様子を窺つて居ると、漸々荷造りが出来たと見へ、ボツ／＼と、
 れを馬に積み乗せ、裏門より引き出し、伊勢崎五郎兵衛始め家
 族一統は密かに其の後に尾いて、此處には早や既に一族郎黨が待
 つて上田城下の町端へ出ると、此處には早や既に一族郎黨が待
 ち合せて、芥川紋左衛門は先に立つて、總勢七十有餘人が足を早
 めて、猿飛助は幸ひ望月の方向へ落ちて行く、二三丁離れて後よ
 り、思つて安心して居るが、佐ハ、奴等は誰も知らん
 と、御存知あるまい、屹度御主人の仰しやつた通り、海野口の平
 も御存知あるまい、屹度御主人の仰しやつた通り、海野口の平
 賀家へ便つて行くに違ひない、兄弟分の六人に對して相濟まん、
 早く大騒動を引き起さんと、兄弟分の六人に對して相濟まん、
 左様だ、と、豪膽極まる猿飛佐助は、悠々寛々としてブラ

修と手具腰引ひて機會の來たるを相待つて居る、然るに此方平賀
 と不義者である、今に見らう城内を轉覆る目に懸がして遣るぞ
 御主人の推量通り、平賀家の家來と相成つたか、憎くき不忠
 事と相成つた、當分は客分と云ふ事にして、城内へ引き留めて置
 すとあつて、重役の列に加へると云ふのも左様かと云つて何
 の功もなきに、重役の列に加へると云ふのも左様かと云つて何
 石や五百石で抱へると云ふ譯にも行かない、左様かと云つて何
 しろ眞田家に於いて一家老を勤めた位の人材だから、僅か二百
 門の周旋に依つて、平賀家に仕官の身の上と相成つたが、何ん
 到頭伊勢崎五郎兵衛親子を始め一門郎黨の面々は、芥川紋左衛
 猿飛佐助は一軒の宿屋へ泊つて、尙ほも様子を窺つて居ると、
 より野澤、豊田と出て参り、丁度三日目に海野口へと到着した
 夫

武田家と録先を交へやうと云ふ野心を思ひて居ります、
 りますからして、眞田家の一家老伊勢崎五郎兵衛成政が、一族
 を引き連れて降参に及んだと聞いて大いに喜び、源ウム、眞
 田家を滅ぼすも近きにあり、目出度い、と、思慮分別の淺
 い大將丈けあつて、只無闇に喜び返へり、今夜は城内に於い
 て祝宴を催さんとあつて、老臣勇士を呼び集め、伊勢崎五郎兵
 衛を引き合はして、大酒宴と相成つた、此の事を窺ひ知つたる
 猿飛佐助は、密かに打ち黙頭き、佐ウム、祝宴などは猪虎才
 千萬、一番之より城内へ乗り込んで、伊勢崎親子を討ち取つて
 呉れん、己れツ今に見らうと、身仕度甲斐しく宿屋を立
 ち出で、海野口城の搦手に歩つて参り、一四邊に氣を配つて暫ら
 く内部の様子を窺つて居りましたが、一應てヤツと大地を叩いた
 と思つたら二丈に近き黒板塀を何なく乗り越へて、内部へスツ
 クと飛び下りた、佐ウム、最ふ大丈夫だ、之からが乃公の世の

助 佐 飛 猿

中だ、師匠白雲齋先生より習ひ覺へし忍術を以つて城内を騒が
 して呉れん」と、ノソリノソリと彼方此方の木戸を通り抜け、漸
 く本丸へ歩つて参り、玄關口へ差し掛ると、受け附けと見へて
 若武士が三人、衝立の前へ車座になつて、酒肴を前に置き、頻
 りにグビリグビリと遣つて居る、佐助は之れを眺めて、佐「イヨ
 僅かの振舞酒に舌鼓を鳴らして居るわい、ヨシ此奴を喧嘩さし
 て遣らう」と口には何か呪文を唱へ、ヤツと氣合を掛けると、佐
 助の妻は「バツと消へて仕舞つた、佐「ヨシ、之れで彼奴等の眼に
 は見へない」と云ひつゝ、佐助は「ノコ」と三人の傍に近寄り、
 一本の燭徳利を取つて、口呑みにグイグイと飲み干し、香をム
 シヤク、食ひ初めた、スルト一人の武士は佐助の飲んだ燭徳利
 を取つて「甲「イヨ、内藤氏遣り給へ、我が君からの振舞酒、
 遠慮を召さるな、ナ、酌ぎませう、内「イヤ、松山氏のお酌とは
 忝ない、ジャア一杯……」と杯を突き出すと、松並半五郎はズ

助 佐 飛 猿

ツと酌ぎますと、斯は如何に一滴もない、松「オヤツ、此の燭徳
 利は今持つて来た處だが……ハ、ア林氏冗談じやないよ、貴公
 獨り誰かに遣つて居ると思へば、皆呑んで仕舞つたじやアない
 か、林「オイ、ノ公は知らないよ……オヤツ乃公の香は誰か
 食つたのだ、一切も無いぞ、内「ハ、ハ、ハ、林「が極りが悪いと思
 つて、香を食つたなんて……自分は今喰つて居つたのじやない
 か」と互ひに争つて居る間に、佐助は燭瓶の酒を悉く呑み干し
 看を一つ食つて了ひ、衝立の傍から見て居ると、三人は背筋を
 立て、内「コレ見ろ、今迄乃公の前にあつた者が無くなつた、松
 並が食つたのだらう、松「之れは、怪しからん事を申す、乃公の
 分迄貴様が食いなから、反對に咎め立てをするとは驚いた、オ
 ヤク、燭瓶の酒は皆無いぞ、ハテ不思議な事だ」と三
 人は顔見合せて居ると、佐助は背後より鐵扇を延して、松並半
 五郎の頭をパンと叩いた、松「ヤ、貴様等二人は何の意図があ

内の計略功を奏し、伊勢崎五郎兵衛親子の自滅、續いて海野口城
する……

第十三回

今しも平賀修理之介源心入道は、不意に杯を引つ手操られて怒
るまい事か源「ヤア、無禮なり伊勢崎五郎兵衛、何等が爲めに
予の杯を奪ひ取つた、酔興でいたしたか但しは意趣あつての事
か、次第に依つては許しは置かぬッ……」と威丈高になつて腕
め附けた、伊勢崎五郎兵衛は屹然仰天「五ッ、威丈高はしたり
御前、手前は此の通り杯を一つ持つて居ります、其の上御前の
杯を奪ひ取るなぞとは思ひも依らぬこと、滅相な事を仰せられ
ますな……」と頻りに云ひ譯をいたして居る時しも、又も佐助
が片脇より、源心の横面をボカンと殴つた源「オヤッ、此奴今

度は横面を……最ふ勘辨は相成らぬ」と一徹短慮の平賀源心
狂氣の如く相成つてスツクと立ち上り、小姓の持つたる一刀持
つが早いか、ヤツと一聲援く手も見せず、伊勢崎五郎兵衛の肩
先深く斬り込んだ、何條堪りませうや、五郎兵衛は大力無双の
平賀修理之介源心入道の刃に掛つて、敢なく其の場へ斬り倒さ
れ、父「ッ……ナ、何に意恨あつて……」と呼吸も絶へく
叫んで居る梓五郎三郎成清は大いに驚きながら、斯は大變と
突つ立ち上り、父「此の有様は……」と、バラバラと
騙げ出さんとする處を、平賀修理之介は隙さず飛び掛り、エイ
ッとはかりに細首丁と打ち落とす、思ひも依らぬ俄かの椿事に、
伊勢崎の一族源心入道、血刀提げ怒りの大
打ち騒いで居る、此方にあつては源心入道、血刀提げ怒りの大
音張り上げて、源「ヤア、伊勢崎の一族源心入道、血刀提げ怒りの大
懐に入る時は、源「ヤア、伊勢崎の一族源心入道、血刀提げ怒りの大

ち郎りは云遠にりがくれ如はら
 落を掛何能ひ巻恐駭る精く彼ば
 し討ら事甲にれし手間も怒方手
 てうんとだ、妻のし、早もきり柄
 御果とす最なき味方のみ、斬ら
 覽すに、一此の者、源心入道は
 入れ君の那上は共、益々怒り
 んの御△我れ自ら立一人に
 と手△アイヤ我が君暫らく、
 大身を賜ふ迄もなく、現はれ
 のし賜ふ迄もなく、現はれ
 槍を提げ、現はれ

り掛らんとす、最ふ此の上は、
 何事だ、妻なき味方の者、
 甲斐なし、為し、斬らんと
 恐れし、早く、人、斬らんと
 間に、遅し、佐助は、
 手早く、兩、の首を、
 振り、斬り、落して、
 左手に、提げ、右の手に、
 刀を、振り、

は、事、だ、最、ふ、此、の、上、は、
 能、ひ、巻、き、に、れ、し、手、間、も、
 遠、巻、に、れ、し、手、間、も、
 云、ひ、甲、斐、な、き、味、方、の、
 何、事、だ、最、ふ、此、の、上、は、
 能、ひ、巻、き、に、れ、し、手、間、も、

の一人は、之なん平賀家名題の薬、
 隆々と槍を扱いて、猿飛望んで、
 受け流し拂ひ除け、暫らくは、
 月に秘術を盡して互ひに、
 伊勢崎親子の首さへ取れば、
 体勢で、すから、只行き掛の、
 ふ、考、で、す、から、只行き掛の、
 斯く、聞、つ、て、居、る、の、で、
 焦、つ、て、エ、イ、ツ、と、電、光、の、
 聲、切、り、落、した、る、猿、飛、佐、
 ら、斯、は、ソ、モ、如、何、に、佐、助、
 ア、ツ、と、驚、く、一、座、の、面、々、
 になつて、源、又、忍、術、を、以、つ、
 が、す、な、遣、る、な、右、往、左、往、
 命、を、掛、け、て、右、往、左、往、

の一人は、之なん平賀家名題の薬、
 隆々と槍を扱いて、猿飛望んで、
 受け流し拂ひ除け、暫らくは、
 月に秘術を盡して互ひに、
 伊勢崎親子の首さへ取れば、
 体勢で、すから、只行き掛の、
 ふ、考、で、す、から、只行き掛の、
 斯く、聞、つ、て、居、る、の、で、
 焦、つ、て、エ、イ、ツ、と、電、光、の、
 聲、切、り、落、した、る、猿、飛、佐、
 ら、斯、は、ソ、モ、如、何、に、佐、助、
 ア、ツ、と、驚、く、一、座、の、面、々、
 になつて、源、又、忍、術、を、以、つ、
 が、す、な、遣、る、な、右、往、左、往、
 命、を、掛、け、て、右、往、左、往、

の一人は、之なん平賀家名題の薬、
 隆々と槍を扱いて、猿飛望んで、
 受け流し拂ひ除け、暫らくは、
 月に秘術を盡して互ひに、
 伊勢崎親子の首さへ取れば、
 体勢で、すから、只行き掛の、
 ふ、考、で、す、から、只行き掛の、
 斯く、聞、つ、て、居、る、の、で、
 焦、つ、て、エ、イ、ツ、と、電、光、の、
 聲、切、り、落、した、る、猿、飛、佐、
 ら、斯、は、ソ、モ、如、何、に、佐、助、
 ア、ツ、と、驚、く、一、座、の、面、々、
 になつて、源、又、忍、術、を、以、つ、
 が、す、な、遣、る、な、右、往、左、往、
 命、を、掛、け、て、右、往、左、往、

逃げ出して遺ろうと、悪戯な男もあつたもの、今や源心入道が猿飛佐助と摺れ違はんとする間一髪、佐助は握り拳を固めて源心入道の坊主頭を力に任せてやつと殴り附けた、幾等豪勇無双の源心入道も、不意を喰つては堪らない、アツと躍り上つたと思つたら、段櫓子を踏み脱して、轉々くアツと下へ落ちる、佐助は戦場に於いて對面せん、能く坊主首を洗つて待つて居れ、去らばであるぞッ』と他迄大言を拂つて、佐助は飛ぶが如く駆け下り、何處ともなく消へ失せ、跡に源心入道は堪つたものじやアございません、段櫓子から轉がり落ちる、後から登り来る家來に頭をコッ、蹴られる、段櫓子では頭を打つ、坊主頭一面瀧だらけと相成つて、漸々家來に助けられて部屋へ戻り來たり、ウソ〜陰りながら怒りは甚しく、源、斯く迄馬鹿にしられて其の儘捨て置く時は、弓矢の手前家の名折れ、豪勇

の大太鼓が、俄かにドン〜と非常を告ぐる龍打の響き、アツと驚く城將源心入道は、天を睨んで火飯を吐かんばかりに憤り、源、オ、悪くき彼れの振舞かな、餘りと云へば子を愚弄したる致し方、飽迄も彼奴を討ち取らねば腹が愈へぬッ』とドンを〜と天主閣望んで登り行く、此方は猿飛佐助、思ふ存分太鼓を打ち鳴らして、城下が俄かに騒ぎ立つたる光景を見て、佐助ハ、之れ程源心入道を怒らせて置いたら、今の今軍馬を以つて押し寄せて來るは必定、之れで兄弟分への云ひ譯も相立つた、何れ歸らう』とスタ〜天主閣を下りて來ると、中段處で平賀修理之助が登り來たるに、バツタリ出遇つた、然し佐助の姿が見へないから、源心入道は左様な事は知らない、源、オ、不埒な奴め……ウソ……』と陰りながら登つて行く、佐助は之れを見て、佐、オヤッ、源心入道奴最ふ堪られなくなつて、大將自ら歩つて來たな、ヨシ最後にアツと云ふ程驚かして置いて

方等も先づ夫れ迄は戦争く、と云つて騒ぐではない、一藩の
 人が戻つて来ると思ふから、能く聞き糺して見れば判らん、其の
 様子では、昨夜以来天文を見るに、海野口方面に殺氣漲つて居る
 始まりませうか、幸左様だ、平賀修理之介が怒りさへすれば戦争は
 めぬ御主人の御眼力、何うも恐れ入りました、然し戦争は始ま
 と、云はれて六人は開口頓首夫れへ平伏して、海、ハ、イ、今に初
 戦争の起るのを望んで居るのであろう、何うじや旨く當つたか
 此の幸村だ、其の方等は佐助の歸りを待つて居るのではない、
 に居つても、天下の形勢は整然と天に通を以つて見抜いて居る
 の位の事が分らなくなて戦争が出来ると思ふか、身は上田、内
 はせて、清「ヘエ……」夫れが御主人分りませんが、幸ハ、ハ、ハ、其
 たではないか、と、星を指したる一言に、六人は互ひに顔見合
 で猿飛佐助を待ち懸れて居る、先刻から頻りに氣を揉んで居つ

氣に拘わる事だ、萬一戦争起るとても、掛引萬端は父上が、指
 圖をせられるに依つて、其の方等は静かにして居るが宜い」と
 怒々として誠められる、六人は仰せ畏んで部屋に歸り、寛「何うだ、
 御主人はお年は若い、豪いものだ、戦争が始まる事が判つて居
 つても、平氣の平座で居られる處が感心だ、貴様等も少と御主
 人を見倣へ、ガヤ／＼騒ぎ興つて見苦しい……」清「ハ、ハ、ハ、
 寛が俄かに強よくなつた、左様な事は何うでも宜いが、早く猿
 飛が歸れば宜いなア……」と昔々心待ちに待つて居る、然るに
 其の日も暮れて點火頃と相成ると、案に違はず猿飛佐助が戻つ
 て来た、直様幸村殿の御目通りへ出で、夫より主従兩人打ち連
 立つて御本丸の昌幸公の御前へ伺候いたし、猿飛佐助は伊勢崎
 五郎兵衛親子の首を差し出し、一伍一什を物語る、昌幸公は
 横手を打つて感心いたされ、昌ハ、ハ、ハ、伊勢崎親子を自分の
 手に掛けず、平賀源心の手に殺さすとは面白い計略だ、幸村我

先々の思ふ通りになつたぞ、此の上は至急軍馬の用意に及べい」
制するにあり、途中に伏兵を設けて源心の兵を喰ひ止め、一泡を
吹かせて呉れん、明早朝總登城を申し付けよ」と、仰せ出で、
相成りまして、愈々真田家の平賀勢との大合戦、七勇士の功名に
手柄、就中猿飛佐助、幸吉の目覚ましき働き振り、之れからでこ
ざいまするが、一寸吹いたしまし、次回は、お楽しみといたし
まする……。

第十四回

借ても其の翌早朝と相成りますと、真田家老臣勇士の面々は、
通知に接して我もく押し掛け詰め掛け、大廣間は一家中の
者共處救しして居例んで居る、正面上段には、真田安房守昌幸公の
を始一子與三郎幸村殿が嚴然とお控へとなり、難て時刻來た

るや、昌幸公は一座見渡し給ひ昌「ヤ、一門郎黨の者登城大
儀である、今朝總登城を申し渡したるは餘の義にあらず、實は
云々斯様く、依つて軍議評定に及ぶのである、各々意見を申
し述べて宜からう」と、仰せ出でに相成つた、此の時與三郎幸
村殿は父君昌幸公に向はれ、幸「アイヤお父上、此の度平賀家と
の合戦、何卒此の幸村一手に御任せ下されたく、屹度平賀源心
入道を取り控いで御覽に入れます」と勇氣凛々として申し述べ
る、尤もスルと昌幸公は莞爾と打ち笑ひ給ひ、昌「成程、汝の申す處
まつた注進の言葉に依れば、平賀家は三千人と承はり候、左
と當方は一千人に宜しく、殊に老臣勇士は召し連れ申さず、
日頃此の幸村が股肱と頼む七人の勇士あちば充分でござる、何
卒此の儀御聞き届け下されたし」と申し上げる、昌「幸公は黙頭
き給ひ昌「オ、好くぞ申した、然らば此の度の戦は汝に萬事

聞者を放つて平賀勢の様子を窺はせると、平賀勢は明日早天より海野口を出発なし、三千人が藩進を上田城へ押し寄せせるの手に聞き、總大将幸村は莞爾と打ち笑ひ「幸ヨシ、然らば此の處に待ち伏せ、三千人を追ひ返して呉れん」と穴山岩千代を呼び二百人を差し添へ、白田より半里ばかり隔て、右に伏せ、望み六郎を呼んで百五十人を添へ、同じく白田より左りに二十町ばかり、天神の森に伏せ勢させ、三好清海入道と伊三入道の兩人は三百人を附けて、海野口街道の片脇の小松原に陣取らせ、猿飛佐助に五十人を添へて遊軍となし、残り三百人は幸村自ら引率して、海野六郎寛十造、左右に従へ、白田の町端に待ち伏せ、旗差物を巻き、馬には牧を刷ませ、静まり返つて平賀勢今や遅しと待ち受ける、平賀勢は斯かる計略ありとは夢にも知らず、勇氣堂々として押し出し、今しも白田の十町ばかり手前迄来たと思ふ頃しも、ズドンと一發合圖の狼火が空天遙かに轟

を委し置く、大敵と見て恐るゝ勿れ、小敵と見て侮る勿れ、油断は大敵であるぞよ、幸ハ、長まりました、一同安心あつて然るべし」と、案然自若として仰せられたが、二家老相木源之助、三家老寛十兵衛、其の他一門穴山小左衛門、海野太郎左衛門始め老臣勇士の連中も、日頃幸村殿の技倆には敬服して居るのでありますから、別に危む者もなく、皆々安堵の思を爲し、寛十兵衛は一子十造に向ひ「十コリヤ十造、血氣に逸つて犬死をしては相成らぬぞ、十造ハ、心得ました、小ヤ、岩千代、汝も其の通りだ、少々腕前を自慢して名を汚す様な事を仕出来すと、此の父は承知しないぞ、岩ハ、長まりました、海野太郎左衛門も甥の六郎を注意に及ぶ、七人の勇士は大いに喜悅んで、幸村殿に從つて新御殿に歸り來り、即刻一千の同勢を驅り催ふし、夜に乘じて密かに上田城内を進發なし、間道を通つて夜を日に繼ぎ、海野口より五里手前、白田と云ふ處へ到着なし

勢だから、源心入道は馬上に突つ立ち、源ヤア、猪虎才千萬なる真田家の振舞かな、僅かの小勢何條何程の事やあらん、ソレ引き包んで討ち取れい」と、烈しき下知一同は勇氣を勵まし、三百人を真中に取り圍んで、一人も餘さじと討ち掛る、清海入道の鐵棒を芋殻の如く振り舞はし、馬を田字巴と乗り立て、四角八面に荒れ出したる勢は、實にや悪鬼羅刹の狂ひ出したるも斯くやと思ふばかりでございます、左れと何んしる敵は目に餘る大軍、捲り立て、一歩も後へ引かず奮闘激戦に及んで居る殿り倒し、捲り立て、一歩も後へ引かず奮闘激戦に及んで居る斯かる處へ本陣に控へたる真田與三郎海野幸村は、三好兄弟の闘ひ危しと見て取り、左右に備へし笈十造、海野六郎に打ち向ひ、幸ア兩人、早く三好兄弟を助けよ、彼れは却々の苦戦と相見へる二人ハッ、畏つて候」と、兩人は二百人を従へて驅け

き渡つた、之れはと平賀勢は足を留めて、一樣に驚いて居る折、こそあれや、道の左右小松原の樹蔭より、ドツと起つた関の聲、夫れと同時に六文錢の旗馬印は翻と風に翻へり、平賀勢の行手に當つて、ドツとばかりに途を遮ざり、駒を陣頭に乗り出し、たる身の丈け、群の大入道二人、之なん云はすと知れた、三好清海入道の如き大番張り上げ、清ヤア、夫れへ来たつたる海野破鐘の如き大番張り上げ、清ヤア、夫れへ来たつたる海野口、城主、兵田安房守昌幸の一人、三好清海入道、同じ伊三入道の左るものありと知られたる、三好清海入道、同じ伊三入道の兄弟なり、先刻より汝の來たるを待つ事久し、入道と入道のを喰み合いだ、イデヤ來たれツ」と、三好清海入道、同じ伊三入道の群がる三千人の真只中へ喚き叫んで突き進んだ、平賀勢は不意を喰み合いだ、イデヤ來たれツ」と、三好清海入道、同じ伊三入道の

出だし、左右横合よりドツとばかりに平賀勢に突いて入り、當
 るを幸ひ無二無三に突き立て難き立て、寛「ヤア、遠からん
 者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、我々兩人は眞田與
 三郎海野幸村の家來、寛十造、海野六郎と云へる者なり、一
 二人は面倒なり、一束になつて掛つて來い」と、人なき處を行
 くが如く、從横無盡に驅け廻るの光景は當り難くぞ相見へたり
 三好兄弟は之れに勢を得て三「オ、寛と海野か忝ない、蛆虫
 に等しき平賀勢馬跡に掛けて踏み躪つて仕舞へい」と、四人の
 豪傑が一騎當千の勇氣を奮つて、一撃に五人三人乃至十人二十
 人、眞逆左様な事もございますまいが、パツタと前後左右
 に打ち倒す其の爲めに、瞬く間に屍は積んで山を爲すと云ふ勢
 ひ、勇將の下に弱卒なし、五百人の軍卒は何れも名を惜み耻を
 知る強者ばかり、踏み込み、喚き叫んで斬り結ぶ、ソガ爲め
 に左しも多勢と誇つたる平賀勢で雪崩を打つて崩れ立ち、ドツ

とばかりに敗走する、大將平賀修理之介源心入道は大いに怒り
 源「ヤア、云ひ甲斐なき味方の振舞かな、小冠者の眞田與三郎
 幸村、何條恐るゝ事のあるべき」と眞先に馬を乗り出し、草摺
 長の大鎧に半月の前立て打つたる兜を着し、采配を千切れば
 かりに打ち振り、士卒を勵まし下知に及んで居る、然しな
 がら浮足立つたる平賀勢は、我れ先に逃げ出し、今しも臼田
 より二十町ばかり天神の森蔭差して、押し合ひ合ひ落ち延
 びたる折こそあれや、忽然として天神の森の彼方より一彪の軍
 馬現はれ出で、眞先に六文錢の旗差物を押し立て、一人の大
 將途の行手に駒を乗り附け、天地に響く大音聲を張り上げて、
 大將「ヤア、平賀勢の腰振共確かに聞け、我こそは眞田與三郎
 海野幸村の郎黨に於いて、豪勇無双と呼ばれたる望月六郎景成
 とは我が事なり、一人も此の處を通す事罷り成らぬ、兜を脱い
 で降参に及べい」と百五十人を左右に従へ、破竹の如く討ち掛

み鳴して残念がり源オ、単法なる味方の者共かな返せ戻
せいらすと必死に叫び戻さんといたすと雖も、全軍敗れて残兵全
たからず、流石豪勇無双の源心入道も、思はず知らず退却なし
今しも海野口城の手前二三丁の處へ來ると、側への稻村蔭よ
り俄かに起る関の聲、忽然として現はれ出たる一隊の馬あり
眞先に立つたる一人の若武者は、甲冑に身を堅めて、栗毛の駒
に打ち跨り、大身の槍を小脇に抱ひ込み、威風堂々四邊を拂つて
馬を乗り出し、逃げ來たる兵卒には目も呉れず、大將平賀源心
入道に信つと眼を附け、武者ヤア珍らしや平賀修理之介源心入道
我こそは先達汝の城内へ忍び込み、其の方坊主頭を殿り附け
たる猿飛佐助幸吉なり、御大將幸村公の下知に従ひ、遊軍とし
て此の處に待ち受けたり、イデヤ一騎打ちの勝負に及べいと
槍を扱いて隆々と突き掛つた、イヤ怒つたのは平賀源心入道で
ございませう、源オ、汝は誠に猿飛佐助であつたよな、能くも

る、平賀勢は屹然仰天、△ソリヤ、又眞田の計略に掛つたるを
逃げる、平賀勢は屹然仰天、△ソリヤ、又眞田の計略に掛つたるを
より田の口、街道に逃げ込まんとする一利那、右手の森蔭よりド
ツと揚げたる此の関の聲と諸共に、二百人の同勢を従へ、眞先に駒
を進めたる此の一人は、之なん眞用家七人勇士の中に於いて、
大太刀使ひの名人と云はれたる、穴山岩千代其の人なり、四尺
に餘る陣力を眞甲に振り翳し、穴ヤア、敵の奴原承はれ、
汝等の來る事は篇より汝等を知り得るが故に、御大將幸村殿の仰せ
を蒙り、先刻より汝等を待ち受けたり、一人も残りす首を渡せ
せい」と逃ぐるを追ふて斬り捨てる、平賀勢は一人も残りす首を渡せ
ヤ、此處にも眞田勢が伏せて居るぞ、敵はぬ、と今度は海
野口街道を差して、我れ先に逃げ出だす、大將幸村は九百五十
人が一手になつて、藤進に追つ驅ける、平賀源心入道も齒を噛
み鳴して残念がり源オ、単法なる味方の者共かな返せ戻

四邊を見廻はして居る折しも、密かに源氏の馬の下腹へ廻つた
る猿飛佐助は、突然馬の前足を雙手に横倒しに、頭轉倒と投げ
ツと叫んだ聲共、源心を乗せたる儘倒しに、頭轉倒と投げ
附けた、大力無双の佐助に掛つては馬も災難でございます、
屏風倒しに轉倒ると共に、源心は五六間向ふへ筋斗打つて投げ
出された、シテ遣つたりと佐助は躍り込まんとする間一髪、主
君の一大事と平賀家腹心の郎黨、平賀刑部左衛門、安田玄蕃の
兩人は、バラ／＼と佐助を遮ぎり、左右等しく切り掛る、佐
、イ邪魔立ていたす不埒な奴、其處退け、と同じく討ち合
いましてが、何んして相手も平賀家名題の豪傑だ、容易に討ち
取る譯に参りませぬ、其の暇に源心入道は家來に助けられ、這
々の体に逃げて出だす、幸村も此の体見るより、幸フン猿飛佐
助を助けよ」と又も兩軍入り亂れて大激戦に及びました、が、平
賀勢は大將の落ち延びたるを見て、ヤレ安心と戦ふ氣勢は何處

我が城内を騒がしたり、然のみならず此の度の戦争も、其の方
が仕出來した事である、此處で合ふたは天の與へ、汝の素首打
ち落さねば、此の源心は承知が出来ないのだ」と何んしろ力七
十人に敵し、豪勇無双と呼はれたる平賀源心、左右には股肱の
家臣、平賀刑部左衛門、安田玄蕃を従へ、兎角の猶豫にも及ば
ず、陣刀を水車の如く振り立て、獅子奮鬪の勢を以つて斬
り掛る、猿飛佐助は心得たりと、大身の槍を閃かし、打つて斬
き開けば、附け入り、上段下段、丁々發止と、千變萬化の秘術を
盡して、三十有餘の合ひました、少しも勝負相附きませ
ん、斯かる處へ眞田勢は一度にドツと押し寄せ來たり、敵味方
鳴りを静めて、瞬もせず見物する、此の時猿飛佐助は氣を焦つて
ヤツと聲掛けたと思つたら、斯はソモ如何に、今迄馬上にあつ
たる猿飛佐助の委は忽然として消へ失せた、源心入道はアツと
驚き、源、又忍術を使つて隠れたが、己れッ卑怯ッ」と、

欄の上より寄手の模様を見て居りましたが、ソレツと一命を掛けるや否や、一度に狭間を押し開き、指し詰め引き詰め、射手を揃へて隙間もなく射出した、寄手の面々は俄かに色めき立ち、清「ヤ、静まり返つて居つたと思ひしに、斯かる計略があつたのか、残念ながら引けよ」と、流石の三好兄弟も飛道具に掛つては敵はない」と一堪りもなく引き下る、此の時城門を眞八文字に押し開き、只一騎現はれ出たる女武者一人、黒髪を後ろに下げ、浅黄模様の衣類を着し、後鉢巻玉禱甲斐しく、長刀小脇に抱い込んで、駒を縦横に乗り廻はし、女「ヤア、寄手の方々に物申さん、妾事は當城將平賀入道の妻白絹と申す者なり、夫れに押し寄せられしは、兵田家の豪傑三好清海入道同じく伊三入道の御兄弟と見奉る、遠路遙々と御苦勞千萬、聊か御馳走の印を差し上げ参らせん、お騒がせあるとは見苦しく候」と聲も鈴やかにか呼はつた、負けん氣の清海入道、伊三入道の兩

人は、婦女に呼び留められて何條猶豫いたすべき、清「オ、女の分際で小瀬千萬、假令巴板額の勇ありとも、何ぞ恐るゝ事のあるべきや、ソレ掛れい」と、ドツとばかりに引つ返へす、此の時源心の妻白絹は、何に思ひけん、刀投げ捨て、馬上よりヒラリと飛び下りたと思つたら、大手門外にありし幅六尺目方百貫目もあらうと云ふ大石の側に進み寄り、双手を延して件の大石を引つ抱へると見る間に、ウンと惣身の力を入れ、何の苦もなく目よりも高く差し上げ、ヅカ、と眞田勢間近く歩み來たつたと見る間に、白「ヤア、寄手の方々妾の御馳走は之にて候、首尾好く御受け召されい」と、ヤツと一聲力に任せて投げ出した、流石の三好兄弟も、アツとばかりに仰天なし、三「ヤ、即死するもの十四五人、何れも血嘔吐を吐て相果てた、續いて第二第三と、都合三度大石を投げ出され、潰されて死するも

云ひ捨て、引つ返へす、流石の源心入道と妻の白絹は切齒を爲して地を踏み、源、計略に掛つたか残念なり、此の上は城を枕に討死だつ、白絹用意いたせつ、最期の一戦花々しく戦は

寄手の面々承はれ、平賀修理之助源心入道、今ぞ最後の手並を見せん、我れと思はんものは近寄つて功名せよやと仁王の如く突つ立つた、寄手の内より三好清海入道は十八貫の鐵棒提

掛らうとする折柄、後方の聲あつて幸やア、猿飛佐助暫
ら待て、敵と雖も大將を討つには作法あり、控へ居れい
呼はりつゝ、現はれ出でたる與三郎幸村は、源心入道の傍に進み
幸アイヤ、平賀修理之介源心入道、御身の妻白絹は既に折
討死を相遂げ、戦國の例ひ敵と味方に分るれば是非もない、
快よく割腹を遂げられよ」と、白絹の首級を夫れへ差し出せば
平賀源心入道も幸村の振舞に感心なし、源成程、眞田家の麒麟
と呼ばれた處にて切腹いたす、宜しく介錯頼む」と、源よく
賀源心此の處に頭腹十文字に割ッ捌いて相果した、依つて何な
覺悟を定め、眞田與三郎幸村が乘ッ取り、降参する者は夫々勞
く海野口城は眞田與三郎幸村が乘ッ取り、降参する者は夫々勞
は取りらせ、軍卒三百人を残し置いて、幸村殿は七勇士を従へ
正々堂々と勝負を開き、功名手柄を現はしましたが、就中猿飛佐助
於いて七勇士は夫々功名手柄を現はしましたが、就中猿飛佐助

之なん猿飛佐助幸吉なり、佐やア、穴山其の敵乃公に渡せい
と、大身の槍を稲妻の如く引き扱き、隙間もなく突つ掛る、源
心入道も猿飛と聞いて勇氣益々加はり、源ウム、汝は意恨重な
る猿飛佐助、冥途の道伴れサア来い」と、暫らくは上段下段と
人交もせず奮闘に及んで居りましたが、今しも猿飛佐助が突つ
込んだる槍先を、源心入道はエイツと一蹴跳ね返し、眞甲より
討ち下す太刀先鋭く咄嗟佐助は眞二つになつたかと思ひの外、
斯はソモ如何に佐助の姿はバツと消へて無くなつた、源心入道
は切齒を爲し、源や、又忍術を使つたか、汝ッ卑怯ッ」と、
立ち竦んで四邊を睨んで居る折柄、背後に何々と聲あつて、佐
アハ、、、、源心入道驚いたか、乃公が早業で身を躲すを忍術
と心得て居る呆痴者、猿飛佐助の槍先喰つて往生しらう」と、
烈しく繰り出したる槍先に、源心入道は太股をグサと突き貫れ
て、アツと其の場へ尻餅搦く、シテ遣つたりと二度目に突き貫れ

助 佐 飛 猿

は二十才の初陣功名として、敵將平賀源心入道を討ち取つたる軍功振群とあつて、昌幸公より威状を給はり、大層なる面目を施しました、サア之より猿飛佐助の大働き、龍躍り虎嘯くの大活躍は之からでございますが、ソハ次回に伺ひ上げます……

借ても其の後去る程に、真田安房守昌幸公は、嫡子幸村と共に信州上田の城にあつて、武田家隨一の豪傑と呼ばれて居りました。が大膽大膽夫信玄公死去せられて後は、勝頼公は兎角真田安房守を疎し、嬖臣長坂跡部等の言に迷はされ、忠臣を退け倭人を近けるると云ふ風が見へますから、昌幸公は安からぬ事に思はれ、屢々諫言に及びました爲め、到頭閉門の身の上と相成つた、昌幸公は大に武田家の先途を歎息し給ひ、昌ア、武田家の滅亡も最早近きにあり、之れも天運なれば是非もなし』と、密かに

第十六回

助 佐 飛 猿

天下の形勢を窺つて居られますと、案に違はず勝頼公は徳川家を相手として長篠の合戦、海道一の良將徳川家康は織田信長と同盟して、東西兵を起し、大いに長篠で戦を交へた、武田家遂に利あらず、甲州の豪傑勇士討死するもの數知れず、天正十年三月甲州天目山に於いて、最後の決戦、武田伊奈四郎勝頼は戦死、武田家は遂に滅亡に及びました、此の戦争にも真田安房守は閉門の身とて加はる事出来ず、大いに武田家の悲運を歎き、悲みましたが、最早出来た事は仕方がないに、昌幸公は思ふ處があり、ますからして、徳川家の旗下ともならず、織田方に降参もせず、獨立の大名として矢張信州上田城に居りましたが、織田信長も徳川家康も、真田安房守昌幸には多少憚る處があり、ますからして、強て味方に附けやうともせず、其の爲すが儘に任して居ります、借ても光陰は矢の如く月日に關守なく、日々軍馬を助を始め六勇士は、真田與三郎幸村の側にあつて、日々軍馬

の調練、まつた武術の稽古ばかりをいたして居ります、然るに天正十年六月、國引つ返へし、山崎の吊合戦と相成りましたが、明智日向守光秀の爲めに逆殺されて敢なき最期、續いて羽柴筑前守秀吉の計略功を奏し、光秀は三日天下の嘘を遣して遂に山崎の露と消へ失せた、サア此の戦に於いて羽柴筑前守秀吉の勢は素晴らしいもの、天下は靡然として秀吉の指揮を受けると云ふ光景、明智の秀吉は尙も之にて満足せず、自分が天下の權を握らうと云ふ望がありましますからして、天正十年十月十五日、信長の公の御法會を營さんと、彼の有名なる大徳寺の焼香となり、天下の諸大名を大徳寺に呼び寄せた、眞田安房守昌幸公も此の通に知に接して、大いに秀吉の度量に敬服なし、幸村を側近く招かぬ者となるであらう、何んしろ亂世の時代には、秀吉の如き働振

りてなれば駄目だ、彼れは實に敬服すべき人物である、就ては今回都の片傍り大徳寺に於いて、右大臣信長公の法會を營むとの事、之れも秀吉が威勢を示す企てであらうと思ふが、然し左様な事は何うでも宜い、兎も角義理として黙つて居る譯に行かない、其の方大儀であるが、予の名代として都に上り、徳寺の法會に列つて呉れよ、萬一此の法會に於いて柴田勝家と筑前守秀吉の間に争いを生ずる事もある、汝は只燒香さへすれば宜いのだ、臨機の所置は萬事其の方に任すであらう、幸ハ長まりました、此の幸村も思ふ處がありませうからして、假令如何様の事あるとも、天下の笑を受くる様な事は仕りませぬ、シテ供廻りは如何仕りませう、昌オ、予の名代であるから五萬石の格式で行くのが至當だが、左様儀式張るにも及ぶまい、汝が氣に入りの七人勇士と、家來二十人を従へて行けい、其の方の事であれば先の先迄見抜いて居るであらうが、血氣に逸つて